福島県福島市飯坂温泉：鯖湖湯の歴史を今にとどめる温泉観光地

1　形成

東北三大名湯の一つとされている飯坂温泉には、阿武隈川の支流である摺上川の渓流に沿って旅館が立ち並んでいる。福島盆地に出る谷口の河岸段丘上に位置し、右岸の飯坂地区、左岸の湯野地区、２km上流の穴原（左岸）と天王寺地区（右岸）からなる。JR福島駅から20分あまりの距離にあり、泉質は弱アルカリ性単純温泉である。

日本武尊が東征の折、鯖湖湯に入湯したとの伝承が残されている歴史の古い温泉で、西行法師の歌に読まれ、松尾芭蕉もこの地を訪れている。江戸時代には、鯖湖湯（開湯110年頃）、箱湯（789年説、現在の波来湯）、滝の湯（1340年頃）、赤川湯（1812年）など多くの共同湯があり、湯治場として賑わった。現在、９ヵ所の共同湯があり、地元住民を中心に利用されている。特に鯖湖湯は多くの観光客で賑わい、地元の人との交流の場でもあるが、高温のため、慣れない観光客はそっと薄めて入るという。

1876（明治９）年、福島県庁が置かれたことから副島市の奥座敷として旅館が繁盛し、外湯利用の木賃宿も内湯旅館へと変化した。1888年の大火を機に、鯖湖湯周辺の遊郭が現在地に移された。「高楼空中にそびえ管弦の声洋々として……」と表現される賑わいを見せ、三層、四層の建物が醸し出す風情、自然の美しさ、川遊び、舟遊びなどに多くの浴客が引きつけられた。日露戦争傷病兵の療養の地ともなり、近年まで飯坂温泉病院が置かれていた。森鴎外、正岡子規、与謝野晶子をはじめ、竹久夢二、若山牧水、佐藤春夫、泉鏡花、宮本百合子、さらにヘレンケラーなど、多くの文人や著名人もこの地を訪れている。

第２次世界大戦後、吾妻磐梯スカイラインの開通、東北本線の電化、東北新幹線開通などの交通の変化に伴い、団体観光客で通りが歩けないほどに賑った。旅館数が増加して最盛期を迎えるともに、各旅館は７階、８階建てのビルに変身し、現在の姿となった。

2　現状

旅行形態の変化、バブルの崩壊などとともに次第に客足が遠のき、1978年のピーク時の178万人の宿泊客数は2010年には81万人に半減した。最盛期には120軒あった旅館は、48軒に減少した（図）。特に近年、老舗旅館の撤退や経営者交代が続き、川辺には閉鎖旅館やホテルが残され、美しい景観が損なわれている。そこで、2001年から鯖湖湯を中心とする湯沢周辺地区で、2006年からは摺上川左岸をも含む広いエリアで住民と行政の協働により、町並み整備が進められた。家屋、店舗の修景、歩道の整備、ポケットパーク「芭蕉の道公園」など、美しい町並みを取り戻しつつある。飯坂温泉のシンボルである鯖湖湯（写真）周辺には、江戸～明治時代の面影を残す国指定登録文化財の旅館、湯治場時代の旅館などが残されており、蔵造りの酒屋、三味線を商う店などとともに飯坂温泉の長い歴史が偲ばれる。2010年には、江戸時代から続く豪農、豪商「堀切家」の建物や庭園が補修、復元され、新たな観光拠点として期待されている。市有形文化財の「十間蔵」を初め、母屋、蔵が無料で見学できるほか、源泉掛け流しの「足湯、手湯」も楽しめる。

飯坂温泉のもう一つのシンボルである摺上川にかかる「十綱橋」の名は、その昔、両岸を十条の藤の綱で結び、板を渡して歩行していたことに由来する。2004年、選奨土木遺産に認定された現存する最も古い大正期の鋼アーチ橋であるが、交通の要衝であるために

日中は車の行き来が激しいが、夜間にはライトアップされて美しい姿を見せる。

飯坂温泉には共同湯や足湯が多い。現在は９ヵ所の共同湯すべてが町の管理下に移され、料金は200円～300円である。定休日がそれぞれに異なり、６時から22時まで利用できるので、いつでも温泉が楽しめる。このうちの一つが、2011年、十綱橋の袂に新しく作られた太鼓やぐらを設けた和風の外観が特徴の波来湯であり、鯖湖湯に次ぐ歴史を有する。観光客用に、熱い湯と適温に調整された湯の２つの湯船が設けられている。

こうした施設に加えて、四季折々の行事、イベントも盛んである。長い伝統を持ち「日本三大かんか祭」の一つに数えられる勇壮な「八幡神社の例大祭」のほか、近年は「太鼓まつり」、「花桃の里祭り」、「ほろ酔いウオーク」などが行われ、町の人たちの活気に繋がっている。2008年から始まったフルマラソン大会は定着し、1,000人を越える参加者の約半数が宿泊を伴う県外者であり、地域の活性化に繋がる事業として期待されている。宿泊数、旅館数が減少傾向をたどるなかで、2009年に新たな地域づくりの核となる「ＮＰＯ法人いいざかサポーターズクラブ」が発足した。カヤック、そばうち、陶芸、ノルディックウオーキングなど、子供や若者といった新たなターゲットを対象に体験型観光を展開し、運営する喫茶店は情報発信に住民と観光客の交流の場になっている。

３　課題

近年の地域再生事業により、町並み整備や観光拠点施設作りが進められ、新たな飯坂温泉誕生の兆しが見える。しかし、面的な整備が進められている中心部と、点的整備に留まっている周辺部との落差が大きい。摺上川両岸の道路沿いに遺された廃業旅館の荒れた様子は、飯坂温泉の景観を大きく損なっており、観光客には奇異な姿に映る。新たな試みを積み重ねる努力がなされても、それらがなかなか外部評価に繋がらない理由を、外部者の視点に立って捉えなおす必要がある。また、観光客の再度の訪問や滞在を促すには、地域の人たちが連携し、一体となった「心温まるおもてなし」が求められる。さらに、近隣の高湯温泉、土湯温泉などとの差別化や連携をいかに図るかが課題である。今に残されている飯坂温泉の貴重な歴史を生かし、各組織の連携と、動きはじめた若い力の活用が進めば、温泉観光地としてのさらなる展開が望めるであろう。

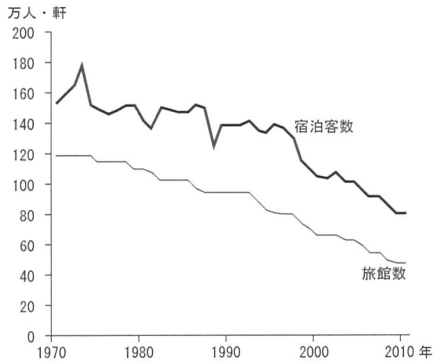


図　宿泊者数と旅館数の変化
（筆者作成）

写真　鯖湖湯
（筆者撮影）

参考：竹内久助（1902）：『岩代飯坂温泉』。

（井上晶子）

福島県いわき市いわき湯本温泉：炭鉱町からレジャー観光温泉地へ

1　形成

いわき湯本温泉は動物由来の温泉である。伝説によれば、日本武尊（やまとたけるのみこと）の父である景行天皇の時代と言うから、茫漠とした昔のことになってしまう。矢傷を負ったところを助けられた一羽の鶴が、美女に姿を変えて一巻の書を命の恩人に授けて、己が傷を癒した佐波古（さはこ）の温泉が実は神の造り給うところのものであることを告げたことが発端となっている。いわば鶴の湯である。

平安時代の延喜式神名帳（927）に「陸奥国磐城郡温泉（ゆの）神社」とあり、少なくとも温泉として千年以上の歴史があることが知られる。鎌倉時代の夫木和歌抄（1310?）にも「さはこ」（三箱、三凾、三函）の地名を読み込んだ歌（「よとともに　歎かしきみを　みちのくの　さはこのみゆと　いわせてし哉」）が収められている。後に佐竹氏などの戦国武将が湯治に来たことも知られている。

江戸時代になると、江戸と仙台を結ぶ主要交通路の一つである浜街道唯一の温泉宿場町として賑わいを見せ、多くの文人墨客も訪れた。当時は温泉の湧出は当然のことながら自然湧出で、その遺構は現在湯壺跡として残っている。その数は53に上った。これらの豊富は源泉を利用して、ある者は湯屋を開き、ある者は宿楼を営み、12軒の宿があったとされている。さらには、街角に木製の湯槽を設けて、住民の便を図るほどだったともある。

常磐炭田は1851（嘉永４）年頃初めて石炭が採掘されたとあるから、幕末の話である。しかし、本格的に石炭採掘の会社が進出してくるのは明治になってからである。

中央資本が進出してきて石炭産業により大いに町が繁栄した反面、採掘の際に坑内の温泉を排出するため、自然湧出であった温泉も水位が低下していった。常磐炭田史年表の1902（明治35）年３月に「湯本温泉で初の上総掘（かずさぼり）による削井に着手」とあるのはこの間の事情を物語る。同じく1905年９月に「湯本温泉保全組合設立」とあるのは、事態が一向に改善されなかったためである。1910年12月には「入山採炭と磐城炭砿、湯本村とそれぞれ温泉救済基金給付の契約書を交わす」とある。幾つかの温泉減少の事件の後に、1919（大正８）年秋に湯本温泉の噴湯が止まった。1942（昭和17）年12月に「入山採炭と湯本財産区との温泉問題、知事の調停で協定が結ばれ湯本温泉に送湯が再開される」とあり、温泉利用が再開された。

石炭産業は戦後の復興期に傾斜生産方式により当時の基幹産業である鉄鋼と石炭に資材、資金を重点的に投入された時代は花形産業たりえたが、1962（昭和37）年の原油輸入自由化によるエネルギー革命の加速化で構造的な不況産業に転落した。最終的に1964年９月常磐炭砿が常磐湯本温泉観光㈱を設立するに至り、1976年に「常磐炭砿西部砿業所、常磐湯本温泉㈱の委託により、温水誘導管を温泉坑の誘導管に接続」に成功することで、長い温泉と炭坑の問題が終焉に至った。石炭産業が斜陽化すると、常磐炭礦（現・常磐興産）会社は石炭産業から観光産業への脱却を図った。炭坑会社が温泉施設経営に転身し、1966年には常磐ハワイアンセンター（現・スパリゾートハワイアンズ）を作り上げたことは映画「フラガール」で著名となった。

2　現状

いわき湯本温泉はJR常磐線の湯本駅の西に広がる温泉地である。歴史的には自然湧出の湯壺のあった地域が三箱の御湯と呼ばれたいわき湯本温泉であるが、現在はこの駅前の温泉街に加えて湯本駅から東に４kmほど離

れたスパリゾートハワイアンズを含めている。その理由は両者共に常磐探鉱からの源泉を汲み上げて利用しているためである。いわき湯本温泉は白鳥温泉の施設も数えて、温泉宿泊施設は27軒である。

泉質は含硫黄ーナトリウムー塩化物・硫酸塩泉である（含S-Na-Cl・SO4泉）。湧出量は毎分4,750リットル、泉温は59.8℃とある（2000/11/24の調査）。中には独自の源泉を持つ旅館もある。また、日本中央競馬会競走馬総合研究所常磐支所に同じ源泉を利用した競馬馬用の温泉入浴施設がある。

3　課題

東北大震災後の復興が最大の課題である。いわき湯本温泉とスパリゾートハワイアンの過去9年間の観光客数の経年変化をみると、毎年、スパリゾートハワイアンがいわき湯本温泉の約3倍である。ただし、宿泊者数で比べると、ともに年間40万人前後であるが、スパリゾートハワイアンが若干少ない。

いわき湯本温泉の観光客数は震災のあった2011年にそれほどの減少を示していない。これに対して、スパリゾートハワイアンズはほぼ5分の1に落ち込んでしまっている。2022年の見込みでは135万人となっており、大きく回復してきているものの、以前の水準には達していない。

いわき湯本温泉の観光客数も宿泊者数も変化がない理由は、復興需要が挙げられる。スパリゾートハワイアンズは、この対象施設ではなかったために落ち込みがひどかったと言える。

観光協会のホームページを見ると、その作りに工夫が認められる。言語の選択で英語、韓国語、中国語が出てくるサイトは少なくないが、ドイツ語まであるのは希少価値がある。

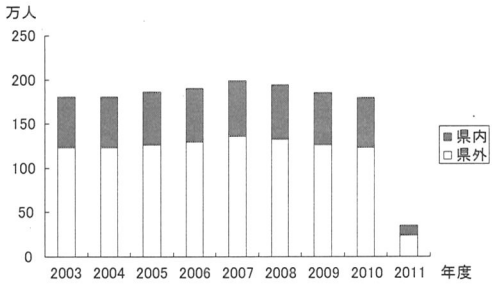


図　スパリゾートハワイアンズ観光客数の変化
（筆者作成）

写真　いわき湯本さはこの湯
（筆者撮影）

参考：いわき温泉旅館組合、いわき市資料。『磐城炭砿の歴史』など。

（浜田眞之）

栃木県那須町那須温泉郷：湯本温泉を中心に高原に展開する温泉地と観光施設

1　形成

栃木県最北部の那須岳（茶臼岳）の山麓斜面、標高約1,000mにある硫化水素泉の那須湯本温泉を中心に、一帯に単純温泉の大丸、弁天、北、八幡、三斗小屋など、硫化水素泉の高雄などの小温泉地が分布していて、那須温泉郷を構成している。交通は東京駅から東北新幹を利用すると、1時間15分で那須塩原駅に着き、連絡バスで30分余りの高原に到達できる。

湯本温泉の起源は、7世紀前期の舒明天皇の頃に郡司の狩野三郎行広が鹿を追って発見したと伝えられ、古くは鹿の湯と呼ばれていた。また、奈良時代前半の738（天平10）年に書かれた正倉院文書「駿河国正税帳」に、小野朝臣が従者12人と那須温泉を訪れたことが記され、遠隔地からの湯治が行われていたのである。さらに、1193（建久4）年には源頼朝が那須野での狩り、1265（文永2）年には日蓮聖人も病気療養で入湯したという。

江戸時代前期の「諸国温泉効能鑑」（温泉番付）には、野州那須の湯は草津温泉に次いで東の関脇に位置しており、諸病に吉と記されていた。1689（元禄2）年、俳人の松尾芭蕉が訪れて『奥の細道』に「殺生石は温泉の出る山陰にあり、石の毒気いまだほろびず、蜂蝶のたぐい真砂の色の見えぬほどにかさなり死す。」と記し、「飛ぶものは雲ばかりなり石の上」と詠んだ。この殺生石の荒れた火山地が広がる横の高台に、源平合戦の屋島で扇の的へ弓を引いたという那須与一が祈願した那須温泉神社がある。

那須湯本温泉では、幕末の1858（安政5）年の山津波によって温泉場が壊滅的な被害を受けた際に、黒羽領主の大関増徳氏が土地を提供して復興に尽力した。人々はその支援を得て現在地へ移り、新しい温泉場を形成した。温泉神社下に鹿の湯から引湯した温泉を通りの中央に設けた5ヵ所の共同浴場へ配湯し、その両側に28軒の湯宿が規則的に配置された。領主にとっても、温泉地の湯銭は財政上欠かせなかったことを伺うことができる。

1876（明治9）年刊行の内務省編『日本鉱泉誌（中巻）』によれば、当時の年間平均浴客数は2,422人とあり、伊香保温泉の24,883人や草津温泉の24,150人の10分の1に留まっていた。1923（大正12）年の内務省編『全国温泉鉱泉ニ関スル調査』では、伊香保の22万人に対して那須湯本は12万人となり、その後の発展がうかがえる。

2　現状

那須湯本温泉の鹿の湯共同浴場には、療養客が多く集まるが、観光客もまた散策の途次に入浴する。41℃以上の高温泉が1℃きざみで44℃まで異なる4つの浴槽があり、その他に46℃と48℃の2つの浴槽がある。これら複数の浴槽に浸かる泉質は酸性の硫黄泉で、皮膚病、胃腸病などに良いと言われるが、時間湯の入浴法が決められている。まず、入浴前に柄杓で100～300回後頭部にかける「かぶり湯」をした後、2～3分間胸まで湯に浸かり、さらに湯から出て再度2～3分間の全身浴をし、これを15分ほどかけて繰り返す。草津温泉の時間湯とは若干異なった入浴法が伝えられていて、温泉文化としても今日まで継承されている。

大丸温泉は高温の温泉の小川を堰きとめた露天風呂が人気を博しているし、標高1,400mの最高所にある三斗小屋温泉は、秘湯としての特性を持ち、登山客や保養の客が多い。その一方、新那須温泉には大規模な那須サンバレーホテルが立地しており、総合レ

ジャーセンターの機能を果たしている。日光国立公園でもある茶臼山へはロープウエーが架設され、スキー場も整備されている。山麓には八幡ツツジの大群落のほか、特に多くの美術館や博物館が点在しており、文化観光にも寄与している。

那須温泉郷の年間観光客数は1996（平成8）年の547万人をピークに少しずつ減少しているとはいえ2010年で514万人を数える。宿泊客数はそれぞれ216万人、167万人で宿泊率は40%、32%である。2010年現在、旅館、ホテルの宿泊構成比が約70%を占め、以下、ペンション11%、ロッジなど7%、寮・保養所5%と続くが、寮・保養所は撤退が多く、最盛期に比べて宿泊客は4分の1に減っている。また、観光の季節性を見ると、高原を舞台としているので、8月の71万人をピークに5月から11月までに客が多く、冬季はオフシーズンとなっている。ゴルフ客は20万人台前半で20年間安定しており、レジャー施設入場者数も、近年では400万人に届きそうな勢いである。

3　課題

那須温泉郷の温泉地は、那須湯本温泉を中心に広大な那須高原に散在しており、それぞれ個性的であって、宿泊客の需要を喚起できるとともに競合を避けることができると考えられる。特に観光季節性が著しいので、その通年化を図る必要がある。また、観光客は相変わらず滞在型というよりは1泊型の行程のもとに移動している。しかし、再訪の意向は高いので、観光要素が豊富な那須温泉郷では、地域性をアピールすべきである。こうした客層に対して地元民が四季折々に地域の特色について実地にガイドをするならば、客の滞留時間も増えるし、何よりも客と住民の触れ合いが生まれ、口コミによる観光客誘致にもつながる。ガイド料を徴収したり、予約を必要とするのではなく、観光協会などが養成した意欲のあるガイドを各観光ポイントに配置し、客に那須温泉郷の感想を聞く自然の会話の中で、担当の範囲内における自然、歴史、文化などを自分なりに説明すれば良いのである。全国の温泉観光地に共通するが、毎年カラフルなパンフレットなどに予算をつけ、その成果が不透明な宣伝に依存するのではなく、温泉旅館組合のホームページにある立派な解説を充実させて小冊子にし、客に配布すれば永久に保存して再訪の参考にするに違いない。

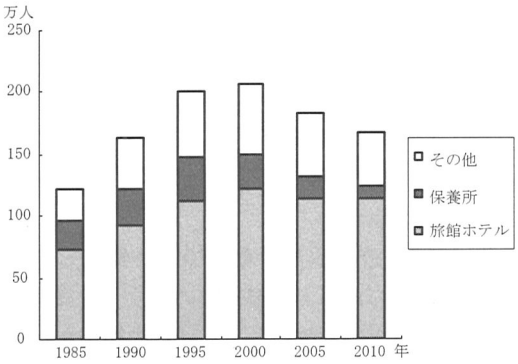


図　那須温泉郷宿泊者の変化
（筆者作成）

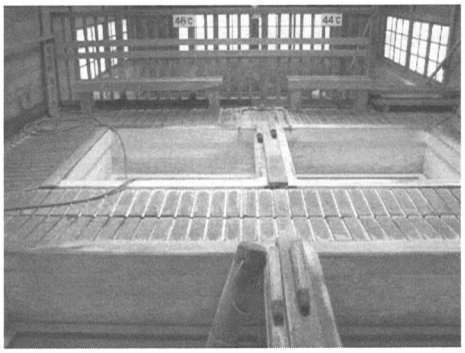


写真　那須湯本温泉鹿の湯
（筆者撮影）

（山村順次）

温泉地域研究　第20号　68～69（2013）

群馬県渋川市伊香保温泉：近世初期に形成された日本初の計画的温泉街

1　形成

上毛三山のひとつ榛名山の北東斜面の標高約700mに立地している群馬県伊香保温泉は、日本最初の計画的温泉町と言われる。1576（天正４）年、武功のあった木暮下総守が伊香保支配を命じられ、一族郎党を引き連れて入植し、伊香保神社付近に古くからあった数軒の宿を加えて新しい温泉集落を形成した。階段街の中央に大堰（湯道）を流し、その両側に各７軒の大屋（温泉宿経営者）が配置されて、大屋層が伊香保温泉を支配した。大屋は最下流の２軒を除いて年番制で名主を勤めたので、それぞれの12支が決められていた。寅年の名主を勤めた金太夫旅館は、現在でも玄関ホールに大きな虎の剥製を飾っており、さらに温泉集落中央の階段下を流れる湯道（大堰）の脇の歩道に虎のレリーフが彫られていて、金太夫旅館への標識の役割を果たしている。

明治初期の火災で大屋層が交代し、現在４軒の大屋が残っているが、その他は外部からの進出者であり、大堰の温泉権利は今日まで大屋に継承されている。そこで、大屋に隷属していた門屋層や外部からの進出者などは、新たな事業拡大の場として隣接した高台や階段街下に出て温泉街の拡大をもたらした。階段街下の農地を買収して移転した中小旅館は、新たな温泉を掘削して利用し、現在では従来の褐色の硫酸塩泉の源泉の湯を「金の湯」と呼び、新しい透明なメタ珪酸の湯を「銀の湯」と呼んで、観光資源としての温泉の価値を高める工夫をしている。

明治以降、ドイツの温泉医学者であるベルツ博士が伊香保に滞在して、その眺望の良さや避暑地として好適な夏の気候条件を伝え、伊香保は外国人の避暑地ともなった。また、小説「不如帰」の徳富蘆花や大正ロマンを象徴する美人画・抒情詩の竹久夢二などの文化人も数多く来訪し、現在、蘆花文学館や夢二記念館が整備されている。第２次世界大戦後の高度経済成長期後には、狭小な階段街下の隣接地に多くの資料館や博物館などの文化施設が開設され、伊香保温泉の性格に新たな文化性を加えた。

一方、石段街に接する高台にはロープウエイが架設されており、スケート場となっている。その周辺には町の開発策に応じて、石段街の小規模旅館が移転して開業した旅館街が発生した。

2　現状

石段の階段街には、規模の大きな旅館や土産品店、食堂などの観光施設が集中しており、「石段の湯」共同浴場もある。その傾斜地の中央道に地下に湯道の大堰が流れており、これを小窓から観察できるように配慮されている。また近年では、階段街は落ち着いた町並み整備が進められており、2010年にはこれまでの温泉街末端に続く広い階段が整備され、365段の新しい石段街が誕生した。源泉の赤茶色の温泉を湯滝として流し、温泉町の雰囲気を醸成していて、新たな温泉広場として機能している。また、３月３日のひな祭りの際には、石段に幼稚園児が着飾って並び、人間雛のユニークさが多くの客をひきつけて賑わう。

石段街を登ると伊香保神社が鎮座している。伝統のある上野国三宮であり、温泉医療の神として知られる。さらにその横道をたどると、紅葉がすばらしい源泉公園への散策道に続き、硫酸塩泉の赤茶けた源泉に到達する。ここには、伊香保温泉を支えている源泉に浸かれる共同浴場があり、飲泉場や朱塗りの太鼓橋もあって、情緒豊かな散策を経験できる。

伊香保温泉は年間110万人をこえる宿泊客が来訪する日本有数の温泉観光地である。かつては上越線と吾妻線の分岐点にある渋川から鉄道が通じていたが、現在では路線バスが連絡している。さらに、伊香保温泉を拠点に、近くの榛名山や榛名湖、水沢観音を訪ねる観光もさかんである。

3　課題

伊香保温泉は、その歴史性、温泉利用構造の特異性、ユニークな階段街の町並み、東京大都市圏からの近接性など、温泉地の立地条件に恵まれている。群馬県内のみならず全国的に知名度のある温泉地として位置づけられるが、温泉地の評価では、東京から遠隔地にある草津温泉に引き離されている。近年の温泉客は、まずは①温泉資源、②温泉地の町並み景観や情緒性、③温泉地や周辺の自然環境の良さなどを評価基準のトップ3にあげているのである。

伊香保温泉は、日本最初の計画的温泉場であるとはいえ、階段街を歩く観光客にとっては、その歴史性と温泉利用の仕組みについて、現地を歩きながらガイドが案内することが求められている。また、階段街の景観保全に関しても、相変わらず乱雑な看板や広告が階段街の景観を破壊しているのである。温泉資源性に関しても、金の湯、銀の湯などと言ってはいるが、その両者を短い時間で体験できる公的な浴場施設が整備されていない。ここに、温泉場をあげて近接の旅館がお互いに温泉浴場を自由に組み合わせて、温泉利用を促進させることが肝要である。素晴らしい温泉観光地であるがゆえに、まずは温泉客に対してきめ細かいもてなしの心を醸成することから取り組むことが求められる。

写真1　伊香保温泉の階段街
（筆者作成）

写真2　伊香保温泉の新源泉広場
（筆者撮影）

参考：山村順次（1993）：「伊香保温泉の発達と現状」温泉61巻12号

（山村順次）

群馬県中之条町四万温泉：首都圏における現代版湯治場

1　形成

四万温泉は、四万川の渓谷に沿う閑静な環境にあり、温泉地への入り口から温泉口、山口、新湯、ゆずりは、日向見の５つの小温泉集落が連続して立地している（図）。その創始は、延暦年間（782～806）に征夷大将軍の坂上田村麻呂が入浴したのが始まりと言われる。歴史的に四万温泉が湯治場として開発されたのは、山口において戦国時代の1563（永禄６）年、岩櫃城主に仕えた田村家が湯治宿を開いたのが始まりであると言われる。後にその分家が寛永年間（1624～1643）に新湯（荒湯）に進出し、さらに1694（元禄７）年には関家（積善館）が湯小屋を建て、この田村家と関家が四万温泉の指導的役割を果たしてきた。こうして湯治場に人々が集まり、温泉街として発展したのは、元禄文化が花開き始める江戸時代前期である。1682（天和３）年の「湯銭取り立て帳」によれば、現在の群馬県各地のみならず、遠く江戸からの湯治客も多くなり、江戸時代の前期から中期にかけて、四万温泉は急速に湯治場として発展した。1761（宝暦11）年には、山口と新湯を合わせて700人ほどを収容するに至ったのである。

明治期には、群馬県の養蚕農家の湯治客が多かったが、大正から昭和初期になると、夏には東京の下町の商人層、初夏には北関東の伊勢崎、桐生、足利、秩父などの機業地帯からの商工業者など都市住民の湯治客が増え、東京の客が半数を占めるほどになった。ここに、四万温泉は都市住民の保養の場としての性格を確立した。

2　現状

四万温泉は、質量ともに優れている。2012年現在、源泉は日向見10（うち枯渇１）、新湯11、山口22（うち枯渇１）の計43ヵ所あり、その約90％が自然湧出である。平均60℃の高温のナトリウム・カルシウム－塩化物・硫酸温泉が毎分3,400L湧出しており、高度経済成長期の1969年には、毎分1,717Lであったから、温泉湧出量は２倍に増えた。

宿泊収容定員は1969年で2,500人（旅館数46軒）、2012年で3,258人（41軒）であるので、温泉資源指数（収容定員１人当たり温泉湧出量）はそれぞれ0.7から1.0へと高まっている。四万温泉の総浴槽数は164であり、特に、田村旅館は本館と別館に計20ものユニークな浴槽を持ち、１旅館内で湯めぐりを楽しめるので多くの日帰り客を集めている。温泉口に３億5,000万円を投じて新設された環境省「ふれあい・やすらぎ温泉地」補助事業の日帰り温泉施設「四万清流の湯」も好評で、毎年８万人台の入浴客数を維持している。さらに既存の共同浴場も改装され、それまで住民しか入れなかったものを開放することで一般の人が入れる共同浴場が３つになり、湯めぐりが可能となった。現在では無料、有料合わせて６ヵ所の外湯があり、日帰り客を含めて人気を博している。四万温泉の旅館経営形態に変化があったとはいえ、基本的には滞在型保養客を主たる客層としていることに変化はない。温泉は古来、特に、神経痛、リウマチ、皮膚病、切り傷、すり傷などの効能があり、飲泉すると胃腸病に効果があると言われ、飲泉や伝統的な蒸し湯も行われている。集落内には、飲泉所が個人所有を含めて設置されており、また最近では足湯を楽しめる施設が設置されるなど、温泉を多面的に楽しめるように整備されつつある。

3　課題

四万温泉は、10数年前「新湯治場宣言」を発し、数泊の滞在による国民の保養と健康に役立つ温泉場として位置づけ、地域をあげてその具体策を提示してきた。環境省の国民保養温泉地事業を積極的に展開し、遊歩道、苑地、温泉プール、温泉館、共同浴場などが配置され、環境保全に配慮されていること、２泊以上の滞在客を受け入れるために、半数以上の参加旅館のもとに低料金を設定した各種プランを発表したことなどである。

一方、四万温泉の各地区には、国重要文化財日向見薬師堂、天然記念物四万川甌穴群、登録文化財積善館と情緒ある慶雲橋や田村本館の茅葺玄関など見所が多く、近くに四万川ダム、奥四万湖もある。近年、都会の若者や中年女性グループなども四万温泉の情緒や自然環境、温泉の良さなどに魅力を感じて来訪している。これらの客や滞在客などに対して地域内を案内する地域ガイドシステムを、早急に立ち上げることが急務である。温泉客がガイドとともに地域内を歩いて触れ合い、四万温泉の歴史や自然環境の特色を学び、さらに４ヵ所もある無料の外湯に浸かって疲れを取る幸せを味わうことが、国民保養温泉地としての四万温泉にとって検討されるべきである。また、四万温泉には、常勤医がいる診療所があるが、国民保養温泉地として重要な温泉療養の相談、診察、健康相談などに関しては、さらに専門医の配置が必要である。

近年、NPOによる空き店舗の利用で、歩ける温泉街への取り組みにも力を入れている。このNPOも地元の旅館商店の若手経営者で設立されており、一定の成果が現れてきている。具体的には土産品兼旅館の空き店舗を県と町の活性化事業の補助金を活用して改築し「喫茶店兼土産品」に足湯をセットしたことなどがあげられる。これらは地元有志のNPOによって運営されている。

過去には温泉街よりも個々の旅館の個性が重視されて無秩序な旅館街が形成され、結果として温泉街の景観が損なわれ、温泉情緒が失われた。しかし、最近ようやく温泉街の重要性が認識されつつある。今後、街並み景観の保全、再生を早急に検討すべきである。

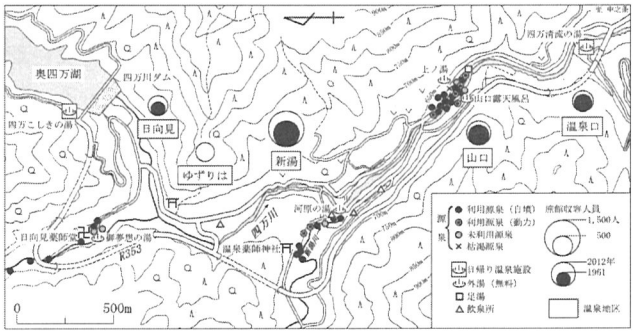


図　四万温泉の観光地域構成
（筆者作成）

写真　群馬県文化財指定された旅館
（山村順次撮影）

参考：小堀貴亮・山村順次（2005）：「国民保養温泉地・四万温泉の地域変容」温泉地域研究、第５号

（小堀貴亮）

群馬県草津町草津温泉：日本第1級の温泉と伝統的景観を活かし、高原開発で発展

1　形成

群馬県草津白根山の火山地域の標高1,200mの高地に、日本を代表する草津温泉がある。

温泉発見伝説に僧行基の布教や源頼朝の鷹狩りなどの説があり、江戸中期の八代将軍吉宗が温泉を江戸城へ運ばせたとも言われる歴史のある温泉地である。江戸初期に発行されたという温泉番付では、草津は全国トップの東大関に位置し、温泉の効用が高く評価されていた。そこで、遠隔地からも1ヵ月以上の長期滞在をする湯治客が集まり、自炊をしながら病気治療に専念した。明治期になると、大学教師として来日していたドイツのベルツ博士が草津を訪問し、温泉の利用と温泉地のあり方を指導したが、地元民の理解が無くて十分な成果をあげられなかった。この頃、湯治客が湯揉みをした後に47℃ほどの高温の温泉に3分間浸かる草津独自の「時間湯」の入浴法が普及し、今日でも地蔵の湯と千代の湯の共同浴場で行われている。

草津温泉が観光化するのは第2次世界大戦後の高度経済成長期であり、大源泉の湯畑を取り巻く旅館が大規模な観光旅館に変わり、湯畑源泉から流れ出る温泉を利用した滝の湯（打たせ湯）は観光用の滝つぼに変えられた。当時の滝の湯には、薬師如来の薬師滝に加え、薬師如来を護る十二神将に因んで12本の湯滝が落ち、歴史的、文化的にもその保存が叫ばれていた。しかし、この時期に湯畑下の歴史的な町並みとは対照的に、高原部のリゾート化が進み、ロープウエーの架設、スキー場とともに洋風ホテルやゴルフ場などが開発された。さらに、1980年代末のバブル期にはリゾートマンションが林立することになり、外部の識者や地域住民から、温泉地の環境保全や観光経済振興の面から議論が起こった。

2　現状

温泉は自然湧出の強酸性の硫酸塩泉・塩化物泉であり、湧出量は毎分32,000Lにおよび、温泉地単位の自然湧出泉で見ると全国1位にランクされる。この狭い高地の空間に200もの宿泊施設があり、2010（平成22）年の宿泊客数は、首都圏からの客を中心に180万人を数え、全国6位である。温泉地の宿泊施設は充実していて、大規模ホテル、高級旅館、一般的な旅館に加えて、草津が発祥のペンションや民宿もあり、多様な客層に対応している。

しかし、近年では日帰りの客も多くなり、毎年100万人を前後する状態である。

また、日本温泉協会のアンケート調査では、ここ10年間の長い期間にわたり、草津温泉が「これまで行って最も良かった温泉地」と「今後最も行きたい温泉地」1位にランクされており、いずれも2位の温泉地を大きく引き離しているのである。

また、スキー客は20万人、ゴルフ客は1万6,000人、白根火山ロープウエイ利用客は25万人で、四季を通じて客が絶えない理想的な通年型温泉地として発展している。その背後には、狭い空間に居住する人々にとって、各種の問題について意見が異なることもあるが、古くから草津に住まう観光業者、行政担当者、町民の一体感があって、時間をかけながら時代に調和した地域づくりが着実に実現しつつある。2013年4月の完成を期して、湯畑に隣接した土地に、「御座の湯」の再建が進んでいる。この温泉浴場は、源頼朝が三原の鷹狩りの際に草津に立ち寄って入浴した伝説を踏まえて再建されたのであり、多様な温泉浴が体験できる施設として機能している。

草津温泉は湯畑周辺のクラシック草津と高

原のリゾート草津が程よく調和しており、多くの観光客や保養客がすぐれた温泉資源や四季折々の景観を求めて来訪する。温泉場周辺では、草津白根山の火口湖であるコバルトブルーの湯釜が第１級の観光資源であり、春のシャクナゲや秋のナナカマドの紅葉もすばらしい。８月初旬の温泉祭り、下旬の音楽アカデミーはユニークな行事であり、冬はスキー場が賑う。しかし、スキー客は最近10年間で10万人（３分の１）も減っており、これは客年層のレジャー志向の変化が如実に表している。

３　課題

温泉資源が豊富であり、町当局は早くから草津温泉の伝統を踏まえた「大滝の湯」共同浴場を創設し、西の河原には大規模な露天風呂を建設し、観光客の人気が高い。一方、温泉場の各地には地域住民のための共同浴場が点在していて、これまで観光客にも無料で開放されてきた。しかし、地元住民の日常生活の場でもある小規模な浴場に不特定多数の客が入浴することも多く、問題化してきたので、一部を除いては積極的に温泉開放を知らせることを避けている。当然のことであり、こうした情報を観光客に知らせる方策をとる必要がある。

草津の温泉場は徒歩で半日ほどで全域を廻れる範囲に集中しており、各所に自然・歴史・文化に関わる特色のある景観が点在しているので、日帰り客を宿泊させるためにも、ボランティアガイドによる草津温泉の多面的な説明をすると良い。草津温泉資料館に始まり、光泉寺境内にある逝去した湯治客の碑や時間湯で「湯もみ」を指導した湯長の碑などを偲び、湯畑の変遷や滝下道りの「せがい造り」旅館の景観、上信越高原国立公園でもある西の河原の源泉地など巡るルートは、ガイドがいて初めて客に感動を与えることになろう。

この間、現在でも「地蔵の湯」と「千代の湯」で行われている「時間湯の湯もみ」を体験したりすれば、草津温泉の評価は一層高まるに違いない。

図　明治初期の草津温泉絵図
（草津町提供）

写真　湯畑の景観
（筆者撮影）

参考：草津町（2011）『草津町勢要覧』52頁。

（山村順次）

神奈川県箱根町箱根温泉郷：豊かな自然と歴史文化に育まれた一大温泉郷

1　形成

箱根温泉郷は神奈川県の南西部、富士箱根国立公園に属し、箱根山の麓から中腹にかけて多様な温泉が沸いている。東京から80km圏内に位置する利便性のよさに加え、箱根火山により形成された山岳地帯が広がり、温泉、河川、湖沼、草原などの自然環境に恵まれている。温泉はアルカリ性単純温泉、ナトリウム－塩化物泉、カルシウム－硫酸塩泉など約23種類の泉質が確認されている。

歴史も古く、現存最古の和歌集『万葉集』には箱根山が詠まれている。温泉は浄定坊が738（天平10）年に発見したという開湯伝承が残されているが、湯治場が確認できるのは湯坂路が伊豆と箱根両権現の参詣道として賑わった中世からである。箱根は鎌倉幕府将軍の箱根権現に対する崇敬や参詣などと関連して宗教上の重要性を増すとともに、1590（天正18）年の豊臣秀吉による小田原征伐に示されるように交通、軍事上の要地であった。

近世には五街道の一つ東海道箱根八里が開かれ、芦ノ湖畔に箱根宿、関所が整備されて多くの人々が訪れるようになった。『旅行用心集』（1810）では、江戸から二十里余、関所の手前で道も険しくないため、都の老若男女が湯治に訪れやすい立地に恵まれ「其繁盛成こと天下第一なり」と記述されている。この時代には早川沿いにある湯本、塔之沢、堂ヶ島、宮ノ下、底倉、木賀の六湯と駒ヶ岳山麓にある芦之湯をあわせて「箱根七湯」と呼ばれ、将軍家への献上湯が汲み出されるなど七湯の効能が広く流布した。こうして七湯が賑わうようになると、湯本を中心に伊勢講などの講集団が一泊だけ湯治（宿泊）する「一夜湯治」が行われるようになった。本来は長期滞在地であった湯治場が「一夜湯治」を行うことは、街道沿いの宿場である小田原宿との争いを生じたが、湯本村の言い分が通り、公的に認められた。この時代には箱根温泉郷をめぐる「七湯廻り」も盛んになり、病気療養のための長期滞在だけではなく、物見遊山の地としても賑わうようになった。

箱根の近代化は道路開削と交通整備とともに進み、東海道線の開通にあわせて1888（明治21）に国府津－湯本間を馬車鉄道が開始され、1919年（大正８）には登山電車、1927年（昭和２）年には、新宿―小田原間に小田原急行が開通し、箱根回遊の乗車クーポンも発売された。また、横浜居留地の外国人が避暑を兼ねて来湯するなど、訪日外国人が温泉地に訪れる先駆けともなった。

戦後には西武と小田急系の交通資本の開発競争が進み、路線バス、ロープウェイ、観光遊覧船などの開発が「箱根山交通戦争」として注目を浴びるほど激しかった。こうした交通資本が更に旅館、ホテル、レストランやスケートリンク場、アスレチックなどのレジャー施設を開設し、観光地化が進んだ。温泉地開発も進み、小涌谷、湯ノ花沢、大平台、仙石原、強羅などが開かれ、戦後は会社の保養所や寮などが急増した。現在は、宿泊施設件数479軒、年間観光客数は約2,000万を数える大型温泉観光地域となった。

2　現状

箱根温泉郷は豊かな自然、歴史、文化をもち、多様な観光交通や観光施設に恵まれている。観光客数は1991年の2,247万人をピークに減少していたが、2005年以降は回復基調になり、東日本大震災が起きた2011年を除いて2,000万人前後で安定している（図１）。

こうしたなか、箱根町では「環境先進観光地」、「箱根ジオパーク」（2011年認定）を掲

げ、箱根火山及びその周辺地域の地質資源や歴史、文化、生態学的資源を保全し、交通手段のエコ化などにも取り組む持続可能な観光地づくりを進めている。

箱根は歴史的に訪日外国人の多い地域であるが、2000年以降の訪日外国人客数は倍増している。特に、中国人観光客には富士山と温泉が楽しめる箱根がゴールデンルートとして組み込まれており、近年は国際情勢を踏まえて東南アジア地域へのプロモーションセールスも展開している。新しい取り組みとして、サブ・カルチャーとのコラボレーションが見られる。箱根が人気アニメの新世紀エヴァンゲリオンの舞台となったことから、若年層や訪日外国人向けに宿泊プラン、スタンプラリー、オリジナルグッズ、オフィシャルショップ、訪日外国人向け観光地図アプリなど、多面的な展開を行っている。

3　課題

日帰り客に比べ、宿泊客は1999年から減少傾向が続いており、寮や保養所は過去10年でほぼ半減した（図２）。宿泊客増加のための滞在型温泉地づくりと共に、訪日外国人の受け入れ体制の充実や交通渋滞の解消が急を要する課題であろう。交通渋滞は観光客のマイカーを駐車場に停めて、電車やバスに乗り換えてもらうパーク＆ライドを初め、マイカーから公共交通への誘導が求められる。箱根町は駅前整備やパーク＆ライドやパーク＆ウオーク、パーク＆サイクルも含めた取り組みを行っており、今後の成果が期待される。

持続可能な観光地を目指すためには、箱根温泉郷の核となる「温泉」と「温泉文化」の保存・継承が肝要であろう。箱根は関所の復元、石仏群の整備、湯場の歴史探訪会など歴史文化を伝える取り組みを行っているが、今後は多様な観光資源に恵まれた特質を活かしながら、箱根温泉郷全体で「箱根の温泉文化」を提供する仕組みが求められよう。

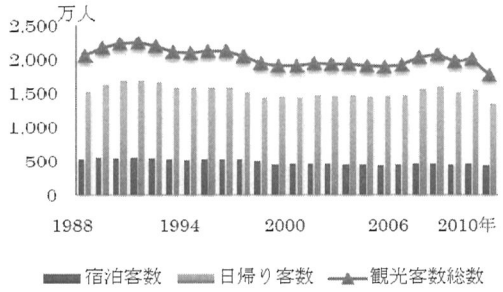


図１　箱根温泉郷の観光入込客数の推移
（筆者作成）

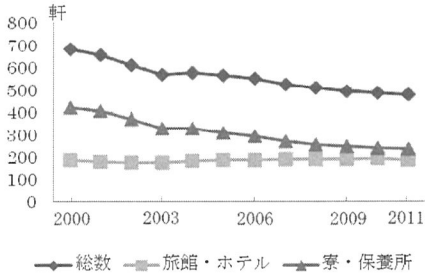


図２　箱根温泉郷の宿泊施設数の推移
（筆者作成）

参考：箱根温泉旅館協同組合編（1986）：『箱根温泉史』354 頁。
箱根町企画観光部（2011）：『箱根町観光プラン実地計画 2011』130 頁。

（内田　彩）

神奈川県湯河原町湯河原温泉：「万葉の古湯」の街並みと泉質の良さをアピール

1　形成

神奈川県湯河原町の湯河原温泉は、箱根温泉郷と並び首都圏から最も近く交通の便が良い大規模温泉地である。関東にも箱根湯本、伊豆山、熱海、草津、四万温泉と古湯はいくつかある。なかでも湯河原温泉は、奈良時代にまとめられた『万葉集』で東国の歌を集めた巻十四に「足柄の土肥（とひ）の河内（かふち）に出づる湯の世にもたよらに子（こ）ろが言はなくに」と詠われ、関東以北で文献上確認し得る最も歴史の古い温泉地である。

中世には地元の土肥氏ら武士、村人、近在の石工が湯治場として利用し、「こごめの湯」「小梅の湯」と呼ばれていた。戦による負傷や石工のけが、傷の治りがとくに早いという評価から「傷の湯」と称えられた。江戸時代の1651（慶安４）年９月、小田原藩主稲葉正則が入湯したことや藤木川の河原から湧き出る所に造った共同湯坪に「本（もと）湯」があったことが、藩の日記『永代日記』に記される。泉源地は当時宮上村に属し、1672（寛文12）年の『村明細帳』に「湯ヶ川原」の地名が初めて登場し、以後、湯河原温泉と呼ばれるようになった。いわゆる温泉番付「諸国温泉効能鑑」で湯河原温泉は三役の座を保っている。

湯河原温泉では大水が出るたび泉源が移り、江戸期に３ヵ所あった共同湯坪が流されることがあった。その分、村人は共同湯坪を「村湯」「惣湯」と呼び、共同財産として大切にした。明治以降もそれらを「一村共有温泉」として地域で守ってきた。

日清、日露戦争の際には傷病兵の療養地に指定され、「傷の湯」として名湯の評判は全国へ広まった。それとともに二・二六事件の舞台になるなど著名な政治家や、定宿にした東郷平八郎元帥など将軍、小説『湯河原より』を書いた国木田独歩や『夜明け前』の島崎藤村などが大正初期に保養に訪れ、最後の小説『明暗』の舞台にした夏目漱石など文人墨客が多数訪れ、多くの文学作品に取り上げられた。

温泉街の発展につれて湯河原でも掘削開発が進んだが、一方で、温泉資源保護には早くから取り組んできた。湯河原町が多くの源泉を集中管理供給しているのも一例である。

2　現状

今日の湯河原温泉は、本来の自然湧出泉源地帯であった藤木川川畔の「温泉場地区」からさらに広がりを見せている。一つは、上流に奥湯河原温泉ができ、もう一つは、東海道本線湯河原駅前を越えた海岸地区にも掘削泉による温泉宿や施設が増えている。さらに、藤木川と合流する千歳川右岸の静岡県熱海市側も掘削泉が増え、伊豆湯河原温泉と呼ばれている。これらを総称して湯河原温泉であり、とくに行政管轄が異なる伊豆湯河原温泉とも旅館協同組合や観光協会間で交流を深め、温泉街振興のイベントなどを連携して行っている。

古くから「傷の湯」として湯河原温泉の評価を高めてきた本来源泉の泉質は、鎮静効果のある石膏（カルシウム−硫酸塩）成分を多く含む石膏泉と含石膏−弱食塩泉である。現在石膏泉は奥湯河原温泉に多く、温泉場地区では後者が中心である。湯河原温泉全体ではほかに単純温泉、含食塩−石膏泉、塩化物泉など５種類の泉質がそろう。

2009（平成21）年に神奈川県温泉地学研究所が調査した湯河原温泉の温泉資源調査では、湯河原は県全体の626源泉中109源泉（約17%）を占めている。半数と最多の泉質は含石膏−弱食塩泉である。町統計要覧では、

毎分総揚湯量は2010年度で6,662Lである。

湯河原温泉は明治以降の歴史からみても首都圏からの保養、静養客が多く、規模の大きさの割には閑静な保養温泉地の性格を保ってきた。最盛期と言える1989年の年間観光客は約775万人で、うち宿泊客は約126万人であったが、2010年には年間観光客約444万人、うち宿泊客61万人に減少した（表）。一方、宿泊施設は1990年に旅館152軒、民宿63軒であったのが、2010年にはホテル旅館137軒、簡易宿所26軒に減っている。ただし、湯河原は大規模宿泊施設が元々少ないので、観光客の減少の割には総数が減少していない。

町営温泉施設では「こごめの湯」と足湯「独歩の湯」がある。温泉地振興行事として、早くから初春の「梅の宴」があり、最大の観光客を呼ぶ。それも1999年の45万人から2010年には約９万人に減少した。集客で続くのは８月の「やっさ祭り、海上花火大会」約６万人で、ほかに「ゆかけ祭り」「湯河原サンバパレード」などを催している。また、４月「土肥祭武者行列」に土肥会がイベントを行う、観光ボランティアや自然観察ガイド養成など、近年地元から活性化への取り組みが目立ってきている。

3　課題

湯河原駅方面から温泉街を通る県道75号が整備されて左右の歩道が広がり、散策しやすくなった。近年、ネット情報を通じて温泉の良さと情緒に惹かれて若い世代の来訪が増え、通りにもイタリアンなど新しいレストランや店舗が増えてきた。万葉公園に足湯ができて以降、より温泉街散策に誘う努力をしてきただけに、誘客強化に旅館協同組合と観光協会をつなげたホームページの改良に取り組んでいる。

東日本大震災直後は影響があったが持ち直した。それでも経済全般から厳しい状況は変わっていない。ただ、湯河原温泉は近場なので若い層も訪れやすい。地元は名湯の誉れ高かった泉質の良さを、さらにアピールしたいと考えている。歴史と泉質を紹介した小冊子「いい湯のはなし」は第一歩となった。ほかの課題は、県道拡幅に伴う影響と、温泉場地区でレトロな情緒が漂う湯元通りの活性化であり、まちづくり協議会に部会をつくって対処している。

写真　足湯「独歩の湯」
（筆者撮影）

表　湯河原温泉の年間観光客の推移（1989 ～ 2010 年）

年次	1989 年	1993	1998	2003	2008	2010
日帰客	649	560	418	489	422	383
宿泊客	127	120	102	91	73	61
計（万人）	776	680	520	580	495	444

（筆者作成）

（石川理夫）

静岡県熱海市熱海温泉：熱海が誇るべき「温泉」という原点

1　形成

熱海温泉の起源は、今からおよそ1250年前の天平宝字（757～765年）頃、箱根権現の万巻上人が、海中に沸く熱湯によって魚類が焼け死に、甚大な被害を被っていた漁民たちを助けようと志し、祈願によって泉脈を海中から山里（現在の熱海市上宿町「大湯間歇泉の地」）へ移したことと伝承されている。このことは山東庵京山の書いた「熱海温泉由来」（1830年）に記述がある。

熱海温泉を愛した著名人で、最も熱海温泉の発展に寄与した一人が徳川幕府初代将軍の徳川家康である。「東照公記」などによれば、1604（慶長９）年３月、家康は２人の子供、義直と頼宣を連れて７日間熱海温泉に逗留し、同年９月、京都で病気療養中の吉川広家（周防・現在の山口県）に見舞いとして熱海のお湯を運ばせたという。

この元祖“温泉宅配便”は後に「御汲湯」として歴代徳川将軍に継承され、４代将軍家綱公の時（1667年）には、大湯の温泉を真新しい檜の湯樽に汲み、それを頑強な男数人に担がせて江戸城まで運ばせるようになった。また、家康公が熱海を幕府の直轄領としたことで土地の治安・風紀が守られ、各地の大名が来訪し、明治以降も時の要人、軍人、文化人などが頻繁に熱海を訪れ、しばしば歴史的会談なども行われた。

明治時代の熱海温泉は輝かしい歴史を数多く誇っている。温泉そのものに関しては1874（明治７）年、中島桑太により記された「熱海温泉考」の存在がある。これは日本人が初めて本格的な温泉分析を行った貴重な文献である。日本で初めての温泉療養センターである「噙気館」の建設も特記すべき事であろう。1885年に業務を開始した噙気館は明治政府の重鎮、右大臣岩倉具視が熱海で病気療養したことが発端となり、内務省衛生局長の長与専斎が主体となり大湯の隣に建設された。ドイツ式の気圧吸入器が設置され、当時としては最新式の医療施設であった浴医局、温泉取締所、大湯運動場があり、入湯療養の患者を診察治療するとともに、吸入療法や浴法の指導が行われていたが、惜しくも1920（大正９）年に焼失した。

1889年に開設された熱海御用邸は、御用邸としては横浜、神戸に次ぐ３番目であり、温泉地としては一番早い建設で、翌年には伊香保温泉に御用邸ができた。当地が温泉地としてではなく観光保養地としての優れた自然環境を持っていたことがうかがえる。温泉行政の面でも熱海市は全国の先駆けであった。1883年６月発布の「温泉に関する取締規則」の制定は当時の国内の自治体では初めての出来事であった。

2　現状

熱海市の温泉、観光の現状をみてみよう。総湧出量と源泉総数を他の温泉地と比較して表１、２に示した。年間の宿泊客数（入湯税ベース）は、1969（昭和44）年の531万人がピークであったが、2009（平成21）年は約292万人程度である。宿泊客数の変動は景気に大いに左右される。1963年ごろからの高度経済成長期には飛躍的に伸び、その後減少したが、1983年ころからのバブル経済期には再び宿泊客数は伸びた。しかし、その後の流れとして減少傾向にある。日帰り客を含んだ観光入込客数は年間1,000万人に近づいた時もあったが、現在は約576万人（2009年）である。宿泊施設数は、1980年の859軒がピークで、2010年ではホテル・旅館が129軒、寮・保養所が193軒で合計322軒であり、ピーク時の半数以下になっている。熱

海市の人口は、1965年の54,540人がピークであり、2011年で39,649である。人口と宿泊客数には非常に強い正の相関関係がある。

温泉は熱海が日本に誇る自然の恵みで、総湧出量は約17,000L/分と熱海温泉の知名度に恥じない湯量を誇る。2012年2月の熱海温泉組合調べで、源泉総数は535井、調査利用泉は266井になる。平均掘削深度は516mで平均温度は63.3℃と高い。最高温度は95.8℃にもなる、平均湧出量は71.4L/分で最高湧出量は328.8L/分である。泉質的には塩化物泉が65%、硫酸塩泉は23%、単純泉は12%である、珍しいところでは伊豆山温泉に含鉄泉が2本ある。温度は42℃以上の高温泉が90%以上で34℃以下の温泉は6%しか存在しない。液性では酸性泉は無く、中性が17%、弱アルカリ泉が77%ともっとも多く、アルカリ泉は7%であった。

3　課題

上記のように、熱海温泉は最盛期より全ての面で減少したとはいえ、温泉地とし日本屈指であり、温泉の泉質も誇れるものがある。しかし課題も多い。

飛躍的な発展を手に入れた熱海は、同時に温泉の持つ良さや自然の保護を忘れて、請われるままに大衆の要求に答える形で町づくりを進め、環境を破壊してしまった事は忘れてはならない。交通便利な環境に恵まれた温泉地熱海が、マンション建設ブームに巻き込まれ、その後バブル崩壊という経験したことのない大不況の時代となり、観光地の灯も一つ消え又一つ消えるという状況から、なかなか脱皮できない時代を過ごしている。

この現状から脱出する唯一の施策は、原点を見直すことである。すなわち熱海の歴史を見直し、その中から復活の糸口を見つけることである。そして、過去を振り返りながら現状に合った形で進めばよいと考える。具体的にいえば、温泉地としての熱海の輝く歴史を掘り起こしつつ、現在の温泉志向に耐えうる温泉地づくりを再構築することである。さらに、将来的には熱海温泉は日本の熱海ではなく、世界の熱海温泉を目指すのでなければならない。そのためには何をすべきか、智恵を絞り、早期に実行に移さなければ将来は安穏としてはいられない。

表1　温泉地別総湧出量（2008）

順位	温泉地	都道府県	湧出量（L/M）
1	別府温泉郷	大分	87,576
2	由布院	大分	43,809
3	奥飛騨温泉郷	岐阜	36,896
4	伊東	静岡	32,748
5	草津	群馬	32,300
6	指宿	鹿児島	25,091
7	箱根温泉郷	神奈川	21,241
8	大分	大分	17,023
9	熱海温泉郷	静岡	16,816
10	那須温泉郷	栃木	15,386

（日本温泉協会「温泉」2011年5月No.844）

表2　温泉地別源泉総数（2008）

順位	温泉地	都道府県	源泉数
1	別府温泉郷	大分	2,511
2	由布院	大分	863
3	伊東	静岡	629
4	熱海温泉郷	静岡	533
5	指宿	鹿児島	459
6	鳴子温泉郷	宮城	369
7	箱根温泉郷	神奈川	344
8	大分	大分	220
9	東伊豆温泉郷	静岡	208
10	奥飛騨温泉郷	岐阜	180

（日本温泉協会「温泉」2011年5月No.844）

（内田　實）

静岡県伊東市伊東温泉：移動・交流によって発展した海の温泉地

1　形成

伊東温泉は伊豆半島の東海岸、熱海から約15km南に位置している。源泉総数737、湧出量は毎分約３万3000L（2012年１月）で、静岡県最大、全国有数の温泉地である。

開湯伝説は様々あるが、記録上では1598（慶長３）年に和田湯（当時は「いとうの湯」）に浴場が作られたとあり、これ以前からお湯が湧いていたことが判る。伊東が大きく変わったのは、首都としての江戸建設の時期である。徳川幕府は伊豆を直轄領とし、1606年には3,000隻もの石船が伊豆に結集、江戸築城のために石を運んだ。採石場の大半があった伊東地域には、西国から商人たちが移住、後に伊東の有力層になっていく。江戸前期には本陣も設けられ、「高位の衆」も入湯し、江戸後期になると樽詰されたお湯が江戸で売られ、「豆州湯河（川）原」という名の“ブランド温泉”となった。伊東は東海道筋から外れていたこともあり、陰陽師や賭博師、浪人など身元不明な人達が流れ込んだ。こうした人物に刺激を受け、「飛上り之心」を芽生えさせる若者も現れ、種々雑多な人たちが出入りする都会的な温泉場として発展した。

明治・大正時代になると政財界人や文化人の別荘が数多く建てられ、源泉掘削も各所で行われた。元は３ヵ所の自然湧出泉だけであったが、明治末には源泉が234本に増加した。河野仁の『猪戸青年団の記録』には、当時の様子が生き生きと描写されている。「明治時代の伊東の温泉は日本一といわれ、田や畑の地上に天然湧出しており、近所の者が小さい浴槽をいけて入浴したり洗濯していた。温泉を掘る風景も実にのどかで、竹の輪の大きい架設の上に二、三人の人夫が唄をうたいながら手掘りであった。“トーラトーラハイカラさんが通ら”と声高に歌う風景は太平そのものであった」。豊富な温泉のおかげで、伊東は急速に開発されていく。1938（昭和13）年には国鉄伊東線が開通し、東京からのアクセスが格段に便利となった。戦争で一時観光業は衰退したが、戦後、一気に観光温泉地へと発展した。

2　現状

伊東温泉というと、狭義には旧伊東町とその周辺を、広義には1950年代中頃以降に温泉地となった宇佐見や伊豆高原などを含んだエリアを指す。狭義の伊東温泉は、店舗や旅館が建ち並ぶ市街地で、湯ノ花通り、キネマ通りなど商店が連なる中に、手湯や足湯、お湯かけ七福神や共同湯が点在している。至る所からお湯が出たため、旅館は密集しておらず、温泉街は形成されていない。唯一、松川沿いに木造三階建ての「東海館」「旅館いなば（現ケイズハウス）」が並び立ち、温泉場情緒が感じられる。別荘時代の建築物としては、昭和初期に建てられた東郷平八郎の別荘がある。伊東自然歴史案内人会に予約をすれば見学ができ、今後は日曜のみ一般公開される予定である。

伊東市郊外、広義の伊東温泉エリアの開発は1961年の伊豆急行線開通により拍車がかかった。会社の寮や保養所も鰻上りで、1973年には336軒と熱海を抜いて県下トップになった。しかし、ここ10年、寮や保養所の数は半減、一方で旅館軒数は倍増しているので、寮や保養所が宿へと鞍替えしたことがわかる。宿泊客数が減少している中、宿の軒数が増加したため、宿泊価格が下落、数軒の地元旅館が安売り型の旅館再生企業に経営を譲渡した。一方で、外国人を積極的に受け入れるゲストハウスや片泊まりの宿、一人旅応援旅館など個性的な宿も出てきている。

伊東はイベントの多い温泉地である。2012年の「伊東温泉観光ごよみ」には「松川タライ乗り競走」「尻つみ祭り」など年間55のイベントが記載されている。これ以外にも、「伊東の街が大好き」という地元有志により、2012年秋、「伊東湯の町バル」が開催された。市街100店舗以上の飲食店や立ち寄り入浴施設などが、それぞれバルメニューを用意し、5枚綴りのチケット（前売り3,500円）を手に、住民や旅行者が街を回遊し、「久しぶりに街に活気が戻った」という。2013年1月には「めちゃ美味グランプリ」と題し庶民派グルメNo1を投票で決める大会が実施され、大盛況であった。サバのメンチサンドやコロッケ、アジの干物ピザなど、新しい伊東の味発見にも繋がりそうである。伊東の郊外には、首都圏などからの移住者が開く小さなギャラリーや工房が点在している。毎年5月、100軒以上のギャラリーや個人宅にアート作品を展示する“文化祭”が開かれている。この「伊豆高原アートフェスティバル」は今年で21回を数え、暮らしと文化とが一体になったイベントとして定着している。2012年秋には、西洋医学と伝統医療のコラボレーションをめざした「からだ会議」が開かれ、セラピーに興味を持つ参加者たちが全国から集った。こうした時代に合ったイベントも新しく始まっている。

大きな動きとしては2012年、伊豆半島が日本ジオパークに認定された。今後は学習や修学旅行などにも力を入れるべく、ガイドの養成が行われている。

伊東を代表する松川遊歩道の景観
（筆者撮影）

3　課題

温泉地はそれぞれ土地の特性に根ざした魅力がある。伊東の魅力の第一は豊富な湯量である。総源泉数と湧出量とも全国3位、宿の浴槽のかけ流し率は約9割であるが、一般にはこうした湯の魅力が認識されていない。これは草津の湯畑、別府の湯けむりといった一目で解るシンボル的景観がないからであろう。かつて伊東には大湯や馬湯があった。ペットのための野湯やシンボル的な浴場があれば、お湯のイメージをより強く印象づけることができよう。また、豊かに湧き出していた自噴泉が数本でも復活すれば、環境復元の取り組みとして高く評価されるであろう。伊東市街には、昔ながらのレトロ建築が散見され、伊東に別荘を構えていた政財界人と地元っ子との触れ合いのエピソードも数々残されていると聞く。これらを含めて見学ルートや地図を作成し、面としての市街観光を提案すれば、地元活性化にもつながるであろう。また、豊かで都会的な温泉地であったがゆえに、温泉地としての一体感が薄く、外国人旅行者の誘客も個々の宿に委ねられている。今後は観光関連事業者、市民、行政がビジョンや情報を共有し、連携していくことが大切である。伊東は歴史的にも東京と関わりが深く、交流や移動も盛んで変化が大きい。「時代をキャッチして常に変化していく」「種々雑多な人モノを受け入れる」ところに活力の元があるように思える。

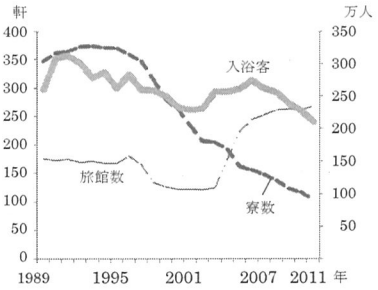


表　旅館・寮の数と入浴客数の推移
（筆者作成）

参考：伊東市編さん委員会編（2002）：『伊東温泉のうつりかわり』

（西村りえ）

静岡県伊豆市修善寺温泉：中伊豆の史跡に富む伝統的温泉地

1　形成

修善寺温泉は、伊豆半島の中北部に位置する静岡県の歴史的温泉地であり、狩野川支流の桂川に沿って落ち着いた雰囲気の温泉場が広がっている。1924（大正13）年に三島から駿豆鉄道が通じており、首都圏からのアクセスはよい。

807（大同2）年、弘法大師（空海）が布教の途次に河床を錫杖で突いて湯が湧いたといい、これが独鈷の湯である。河床には石湯や箱湯など多く源泉があり、湯治客や弘法大師創建の修禅寺の参拝客も訪れるようになった。鎌倉時代、二代将軍頼家がこの地に幽閉されて非業の最期を迎えたが、母政子が冥福を祈って建立した経堂指月殿や墓もある。また、源頼朝の弟範頼も修善寺で自害するなど、修善寺温泉は鎌倉政権の秘話の舞台としても知られる。

温泉は近世期以前までに6ヵ所の源泉があって村持で経営されていたが、その後、近世期に1ヵ所、明治初期に2ヵ所の温泉が発見されて、自然湧出泉の共同浴場は9ヵ所を数えた。その後、これらの浴場は官有地となり、有力旅館は自らの手で温泉を掘削し、内湯を整備した。こうした私有泉は1887（明治20）年には10ヵ所を数え、旅館の内湯として利用され、外湯利用の零細旅館との区別が生じた。明治初期の修善寺温泉集落の構成をみると、内湯温泉旅館14軒、外湯利用の旅籠屋13軒、その他に小売店25軒、飲食店5軒、雑商12軒、質屋3軒、会社2軒があった。修禅寺門前に内湯旅館が並び、河床や河岸に共同浴場が配置され、その周囲に外湯旅館が並んでいた。内湯旅館のうち、菊屋、新井など同族の有力4旅館が温泉場の支配者としての地位を保ち、こうした温泉地域の社会構造は今日にも引き継がれている。

第2次世界大戦後、観光ブームの到来で有力旅館は桂川上流で温泉掘削を展開する一方、小規模の新興旅館も発生した。しかし、1950年（昭和25）年頃には乱掘によって自噴泉が枯渇する状況となり、旅館経営者たちは共同出資で温泉を掘削して利用する機関として修善寺温泉事業協同組合を設立した。その出資比率は有力旅館2軒で47%を占める状況であったが、1981年以降は温泉地域の発展を願っての集中管理のもとに一致協力して高温の単純温泉が利用されており、今日の温泉の安定した供給をもたらしている。

明治期、夏目漱石が病気療養のために修善寺温泉に滞在し、多くの文人も来湯して作品を残した。また、岡本綺堂の「修禅寺物語」の主人公でもある頼家が殺害された箱湯も再建された。こうして、修善寺温泉では有力な2旅館を頂点にした支配構造のもとに、中央観光資本の温泉場内への進出は無い。地元業者からなる観光協会は1964（昭和39）年にロープウエイを、町当局も町有地70haを利用して1967年に10万本のしょうぶ園を造成して、修善寺の知名度を一層高めた。

2　現状

中伊豆の温泉地の中心をなす修善寺温泉は、2008（平成20）年には伊豆市の温泉地（修善寺、土肥、天城湯ヶ島、中伊豆など）の観光客数360万人のうち150万人、42%を占めていた。2010年には319万人のうち127万人、40%となり、わずか2年後で23万人も減少している。宿泊客数は伊豆市全体で86万人から77万人へと減少した。この間、宿泊率は24%で変化はないとはいえ、伝統的な温泉地で宿泊率が観光客数の4分の1に過ぎないとは、大きな問題である。

こうした中で、修善寺温泉では歴史性を反

映した町並みの紹介、弘法大師にちなむ献泉湯まつり、新たに整備された竹林の小径など落ち着いた雰囲気を活かしつつ、地域の活性化を進めている。鎌倉時代の歴史、それも源氏の中枢に関わる史跡を、現地で無料案内するボランティアのガイドは充実しており、高く評価されよう。

3　課題

伊豆半島には、熱海、伊東の大規模都市型温泉地をはじめ、東海岸では熱川、稲取、河津、南伊豆では下田、西海岸では土肥、堂ヶ島、そして中伊豆では伊豆長岡、修善寺、天城湯ヶ島など性格の異なる有名な観光温泉地が各地に立地しており、温泉地間の競争も激しい。近年、温泉地での宿泊が低迷してきている中で、インターネットでの各旅館の施設、料理、料金や観光ポイントを紹介するだけではなく、修善寺温泉を宿泊拠点とした具体的な滞在メニューを作ることである。周辺の観光地や地域性豊かな景観（たとえば、韮山反射炉、わさび田、土肥金山、雲見海岸からの富士など）を取り込み、修善寺ではホスピタリティ豊かなボランティアによる歴史地域案内を前面に出す必要がある。このことは、最近の日本温泉協会の「温泉観光に関する調査結果」で、温泉客が温泉地に求めていることのトップに「地域のガイド」と答えていることからも、宿泊客に対して修禅寺境内、独鈷の湯、源氏ゆかりの史跡群、竹林の小径などを巡る案内をすぐに実践することである。

写真　修善寺温泉の独鈷の湯
（筆者撮影）

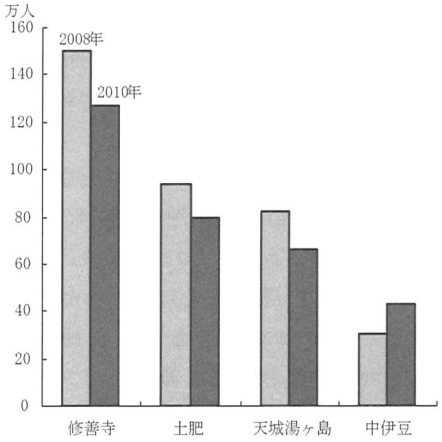


図　伊豆市の温泉地別観光客数
（筆者作成）

参考：山村順次（2012）『温泉地調査報告集（2）』城西国際大学観光地理学研究室

（山村順次）

山梨県笛吹市石和温泉：東京圏をターゲットに健康温泉地づくり

1　形成

山梨県の中央部には、甲府盆地がひろがり、その真ん中を笛吹川が流れている。この支流沿いの各処に旅館・ホテルが建つのが石和温泉地である。JR石和温泉駅を降りると、駅に付設されて、石和温泉観光協会の案内所があり、その前に「駅前公園あしゆ」が設置されている。この足湯が、ここが温泉地であることを示している。

石和温泉は、比較的新しい温泉地で、1961（昭和36）年1月、地元の山梨交通㈱が健康保険組合の保養所「いずみ荘」を建設するために、ぶどう畑を掘削していたところ、地下161ｍの段階で温泉が湧き出した。この湧き出た湯が、川に流れこみ自然の温泉浴場となり、当時は「青空温泉」といわれて全国に報道され、話題になった。

その後、石和町は開発ラッシュとなり、またたくまに一大歓楽温泉地に発展し、旅館、ホテル、保養所などが100軒を数え、収容人数は1万2,000人を超えるほどになった。

東京から特急で90分という立地条件もあってか、集客も順調に伸び、バブル経済ピーク期の1989（平成元）年には、宿泊客数177万人を記録した。しかし、その後は下降状態が続き、ようやく2005年からは133万人台と横ばい状況になりつつあっが、東日本大震災により、再び減少した。

2　現状

石和温泉地は、ぶどう畑の中で、最初に掘削されたあと、続々と石和町内の各所で温泉を掘られたため、温泉地といっても、一か所に集中しているわけではなく、周囲には、住宅もあり、いわゆる温泉情緒なる風情が感じられにくい。歓楽街でもなく，保養地でもない。一見して温泉地とは、なかなか言いにくいというのが現状である。

バブル後、多く存在した旅館やホテルも休廃業が進み、現在では、約40軒の旅館やホテルが石和温泉地区で営業中で、総収容人数は、約9,000人と言われる。

地元の「石和温泉旅館組合」に加盟する有力旅館とホテルの数は、現在35軒で、規模別にみれば、収容人数350名以上が4軒、300～350名までが8軒、100～300名までが12軒、100名未満が11軒である。比較的に規模が大きい施設が多いが、逆に規模の小さな施設もあり、全体としては、多様性に富むとも言える。

「石和温泉と隣接する果実郷」に、年間にどれほどの観光客数、宿泊客数があるかについては、山梨県の「観光入込客統計調査」に公表されている。

この調査によれば、2011年の観光客数は、延べ293万人、2012年では、対前年比で86%の延べ251万人に減少した。2012年の推計宿泊客数は、102万人であった。（注：2010年から、観光入込客数のデータの取り方について、観光庁から、新たな基準が示されたため、それ以前のデータとの整合性はつけにくい）。

石和温泉地区への観光客数、宿泊客数の落ち込みの理由は、①東日本大震災による旅行などの自粛、②インバウンド（海外客）の減少にあったと言える。

特に、「石和温泉旅館組合」は、将来のインバウンド観光振興を想定し、富士山が見える温泉地を売りにして、プロモーションを展開してきた。組合では、中国の若い女性の接客研修を引き受けるなどの努力もしてきた。これらの活動効果もあってか、中国人客を来客の2割程度までに伸ばすこともできた。しかし、この期待も一気に薄らいでしまった。

石和町は、合併して笛吹市と名称を変えている。笛吹市は「桃・ぶどう日本一と温泉の郷」として、観光にも力を入れている。民間でも、「石和温泉旅館組合」は、観光に健康を加えた新たな展開ということで、日本で初の厚生労働省の「温泉利用プログラム型健康増進施設」の認定を受けて、独自性を発揮した。「石和温泉観光協会」は、年間を通じて、「川中島合戦戦国絵巻・花火大会・笛吹川石和鵜飼・・」などを主催して誘客を図っている。

3　課題

温泉地としての「石和温泉」の課題を挙げれば、次の点を指摘できる。①「石和温泉」と「笛吹市」との所在が合致しない。②「石和」を「いさわ」と読むのが難しい。③「石和温泉」の売りは何なのか、明確でない。④大型旅館やホテルが多く、団体客から個人客やグループ客向けの施設転換やもてなしに対応ができていない。⑤石和温泉駅付近のムードが温泉地のイメージとは、ほど遠い。⑥着地型観光受け入れ組織ができていない。⑦体験と交流のプログラムが不足している。果樹もぎやワイナリーの見学以外の開発が必要である。⑧特色ある食べ物がない。鍋もの、丼もの、スィーツなどの新規メニューが欲しい。⑨散策できるコースや立ち寄り場所の設定が不充分である。気軽に歩いたり、自転車でまわれるマップの作製なども必要である。⑩リピート客をどう実現していくのか、戦略が見えない。

表　石和温泉・春日居温泉の年間宿泊客数の変化（万人）

年度	1989	2004	2007	2009
宿泊客数	177	146	133	135

写真１　石和温泉駅前の足湯
（筆者撮影）

写真２　石和温泉観光協会の案内所
（筆者撮影）

（市原　実）

長野県上田市別所温泉：歴史と温泉が織りなす「信州の鎌倉・いやしの郷」

1　形成

長野県上田市西部、「信州の鎌倉」と呼ばれる塩田平の山際に位置する別所温泉は、信州で最も古い歴史を持つ温泉の一つである。東京から新幹線で最短73分のJR上田駅から上田電鉄別所線でおよそ30分の距離にある。

開湯から1200年とされ、七つの苦を離してくれるほど効能があることから、古くは“七苦離の湯”、あるいは、“七久里の湯”と呼ばれた。平安時代の随筆「枕草子」の記述にある“七久里”は別所温泉のことを指すともいわれ、別所の名は、平安期の貴族が効能の高い湯を愛し、別荘を設けたことに由来すると伝えられる。木曽義仲、塩田北条氏、さらに真田氏に愛された温泉地である。特に鎌倉時代には、国の中枢と直接深い関係を持ったため、当時の鎌倉文化が流れ込んだ。真田幸村の隠し湯といわれる石湯、木曽義仲ゆかりの大湯、北向き観音の本坊である常楽寺の開祖円仁慈覚大師ゆかりの大師湯などの外湯に加え、厄除けと招福で全国からの参拝客を集める北向観音、国宝の八角三重塔を有する安楽寺など数多くの寺社が建てられた。また、日本列島の中心にあり、日本の総鎮守と称される生島足島神社も近くに位置する。別所温泉は、これらの寺社と、雨乞いの祭りとして伝承される国の選択無形民族文化財に指定された珍しい祭り「岳の幟（たけのぼり）」なども持つ文化財の宝庫でもある。

別所の温泉は1955（昭和30）年ごろまでは自然湧出していたが、泉温・湧出量ともに低下したため、２本のボーリングを行い湯量を確保した。その後の観光客の増加に伴い湯量不足が生じ、さらに２本のボーリング（1966・1976年）を実施し、51年のボーリングでは1,300L／分、52℃の噴出を見たものの、最初の２本の井戸からの自噴湧出と大湯源泉を除く各所からの自然湧出は停止してしまった。現在の給湯状況は、公衆浴場４ヵ所で210L/m、７件の旅館に666L/m、各集落へ洗濯用12ヵ所の合計62L/m、その他合計1,018L/mとなっている。

昔から湯治場として知られ、今は近代旅館の温泉地となっている別所温泉は、善光寺と併せて参拝するとご利益があるとされ、庶民の信仰を集める北向観音を中心に２つの地区に別れ、それぞれの地区にある共同浴場を取り囲むように17軒の旅館が立ち並んでいる。参道にはレトロな店が並び、昔の湯治場の風情を残す情緒あふれる景観・街並を形成している（図・写真）。

2　現状

観光客数は1991年をピークに減少傾向にあったが、近年は大きな落ち込みはなく、ほぼ横ばいを維持している。別所温泉の泉質は単純硫黄温泉である。泉質の良さと素朴な雰囲気を基本に、比較的小規模の旅館や観光関係者が、小グループや個人の観光客を相手に営業をしてきた。近年の宴会型団体旅行の激減に見られるような旅行形態の変化の影響は比較的小さいとされているが、宿泊者数は他の温泉地と同様に減少し、2003年の18万人をピークに2008年には15万人に落ち込んだ。紅葉と特産物であるマツタケに恵まれる秋は、数多くの観光客で賑わう一方、５月、６月、９月に観光客の入り込みが大きく落ち込むという季節変動も指摘される。

この状況に危機感を持ったこの地域は、自治会、観光協会、旅館組合、源泉を所有する財産区が一つになり、別所温泉魅力創生協議会を発足させた。長野県の補助金制度「温泉地・スキー場地区再生モデル事業」の認定を得て、別所温泉地区再生プランに基づいて取

り組んできた。目指すべき観光ビジョンとして、素朴な人情と豊かな自然、歴史、温泉が織りなす「いやしの郷　別所温泉」を掲げ、「住みやすい街づくり」を念頭に、①”おもてなしの郷づくり“として、観光客向け満足度アンケート及び住民意識調査の実施、観光ガイド養成講座などの開催、②“魅力ある街づくり”として、「基本計画」と「街並み整備の提言」の策定、ガイドマップの作成、統一デザインによる各種看板の整備、各種イベント（蛍観賞会、灯明，灯篭祭り、婚活イベント、ノルディックウォーキングなど）の開催、③“食の魅力づくり”として、地元食材を活用した料理講習会の開催、生ゴミの活用、特産物朝市の開催、各飲食店の一押し商品マップの作成配布、ふーどステーション（試食コーナー）の設置、竹林整備と竹炭制作、竹細工講習会の開催、④“まちの魅力発信”として地域の方々との情報共有と協力関係を図る「いやしの郷だより」の発行、ホームページの開設運営、四季折々のポスターの作成・掲示、以上の４つの事業を行うための委員会を設置し、活動を行った。

2009年から県の補助金を受けて始めた当事業の最終年までの３年間の成果は、地域の街づくりに対して住民との間に一体感が生まれた、観光ガイドを行える地域住民が増えた、街歩きをする観光客数が増えるとともに観光名所が集中するエリアに偏っていた観光客の流れが変わり始めた、地産の農産物の販売数が増えた、観光客と地域住民の間で取り交わされる「挨拶」の数が増えた、マスコミへの登場回数が大幅に増加、地域活性化策を学ぶために全国からの視察などが増えて住民の街づくりへの意識が高まった、循環社会形成で地域の持続性が高まった、別所温泉宿泊者数が微増ながら増加傾向になりつつあることなどである。

3　課題

“おもてなしの郷づくり“の中で実施した観光客向け満足度アンケート調査結果によると、観光客が第一に魅力を感じるのは別所の寺社や街並みであり、温泉旅館の魅力を大きく上回る。この結果は、北向観音や鎌倉時代からの寺社といった恵まれた周りの環境に胡坐をかいていた温泉事業者が、将来への危機感を持つきっかけとなった。今後は、この3年間に行った事業を継続させ、地域が一体となって寺社や街並み、古くからの食文化などをいかに活かした観光誘致が図れるかが課題である。

図　別所温泉案内図
（別所温泉観光協会資料）

写真　北向観音に続く参道
（飯島裕一撮影）

参考：温泉地・スキー場地区再生モデル事業発表会資料（長野県）、別所温泉財産区資料

（徳永昭行）

長野県野沢温泉村野沢温泉：伝統的温泉地域共同体が守る自然湧出泉と共同湯

1　形成

長野県北西部、下高井郡野沢温泉村にある野沢温泉は、西北に千曲川、東南は標高1650ｍの毛無山にはさまれた麓の開けた傾斜地に広がる。野沢温泉の存在が見えてくるのは、信濃国人衆の市河氏『市河文書』中の1290（正応３）年11月付鎌倉幕府下知状に「(高井郡)志久見郷湯山事」等の記述からである。戦国時代、武田信玄が市河藤若に宛てた1557（弘治３）年６月23日付書状に「野澤之湯」と記されている。信玄と対峙していた上杉謙信も、野沢温泉の南にある小菅山元隆寺（現・小菅神社）に同年５月10日付で奉納した戦勝祈願文に「北に温泉有り、山岳これ隔て、群迷を平日に洗う」と記したように、中世期にすでに入浴者を多く集める温泉場として確立していた。

江戸時代の1639（寛永16）年、飯山藩主松平遠江守忠親は浴場設備に改良を加え、仮屋敷を設けて毎年避暑入浴した。52年に及んだ藩主隠居後は湯治滞在用に御用邸と御用湯を設けている。温泉運上金（湯税）徴収に関して野沢村名主以下組頭４名と百姓代連名で中野の代官所に出した1771（明和８）年８月付『覚（おぼえ）』に、「上之湯坪」１ヵ所、「下之湯坪」２ヵ所、計３ヵ所の共同湯坪が記される。上之湯は「惣湯」と呼ばれた現在の大湯、下之湯が河原湯と熊の手洗湯である。村の規定で、草分けの３ヵ所の共同湯は温泉運上金を全戸平均して負担し合う「惣村平均割」の対象となった。

江戸時代の共同湯はこれに現在の真湯、滝の湯、十王堂の湯を加えた６ヵ所であり、後は明治以降に成立した。草分けの３ヵ所以外の共同湯は、惣村に諮った上で開設を決め、開設を希望した最寄り地区住民が「村中融通の心意」を持つことを誓うとされ、すなわち最寄り住民が温泉運上金の過半を負担し、残りは村中で均等負担した。

泉源地の豊郷地区は湧出泉源が複数あるため、唯一の泉源と共同湯広場を中核とする山中温泉とは違い、すなわち代表的な惣湯＝大湯や河原湯を温泉街の中心としつつも、地区毎に増える共同湯に応じて分散拡大するかたちで温泉地が発展していった。

2　現状

1984（昭和59）年に野沢温泉村は地下水資源保全条例を制定し、泉源地として特別保全地区に指定した豊郷地区の豊かな自然湧出泉と清涼な地下湧水を無秩序な井戸掘削や採取行為から保護している。現在の源泉数は40本で、利用源泉は36本。１本を除き42度以上の高温泉で、アルカリ性か弱アルカリ性を示す。総自然湧出量は毎分1,674L（2011年長野県温泉利用状況）である。泉質は溶存物質計で1,000mgを前後するわずかな差から、平均80℃台と高温の含硫黄-Na・Ca-硫酸塩泉や含硫黄-Ca・Na-硫酸塩・塩化物泉といった麻釜周辺源泉に代表される含硫黄-硫酸塩泉系と、大湯周辺源泉に代表される単純硫黄泉（硫化水素型も含む）系に大別される。

野沢温泉の泉源（湯元）、源泉は温泉宿などの自家所有と財団法人野沢会のものに分かれる。うち源泉管理組織の野沢会が７割を占め、湧出量は毎分903L（2012年村統計）である。現在13ヵ所ある共同湯のうち大湯をはじめ11ヵ所を野沢組が、真湯など２ヵ所が最寄り集落・区民がいずれも「総有」し、11ヵ所の日常の清掃管理は「湯仲間」が、２ヵ所は区管理で行っている。野沢組は泉源地である旧豊郷村の11地区を束ねる地域自治組織（2000年に地縁団体として法人格取

得）であり、明治以前からの温泉地域共同体の自治構造、共同祭祀、温泉資源を含む総（惣）有財産を引き継ぎ、温泉地の歴史的な形成に重要な存在である。

野沢では、野沢組、湯仲間の日常的な維持管理努力で13ヵ所の共同湯すべてがスキー客はじめ一般観光客に無料開放され，浴衣がけで湯巡りする「外湯めぐり」が、麻釜での野沢菜茹での情景とともに村の風物詩となっている。

長い歴史、伝統を有する野沢温泉は蓄積された多様な文化資産を観光資源としても大いに活用してきた。旅館の玄関先で男女の道祖神が出迎え、小正月の勇壮な火祭りである道祖神祭りは温泉地域共同体の結びつきの証でもある。野沢菜の菜の花畑の情景をうたった『朧月夜』や『春が来た』などを作詞して野沢で没した高野辰之博士にちなむ「おぼろ月夜の館」、日本のスキー草分けの地として設立した日本スキー博物館、今年で20回を数えるジャズフェスティバルも温泉地滞在ソフトを豊かにしている。

野沢温泉の宿泊施設は冬場のスキー客と共同湯の存在を前提に民宿ペンションが多いのが特色で、現在温泉旅館が23軒、民宿ペンションは200軒以上を数える。2011（平成23）年の年間延宿泊利用人員は20万9,340人、日帰り利用人員は7万8,066人である。

3　課題

温泉街山手にあるスキー場は村人・野沢組が管理運営し、冬場の集客に貢献してきた。スキー人口の減少は全国的であるが、野沢では雪質の良さとアフタースキーの温泉の魅力から、代わりにオーストラリア人をはじめ外国人客が増大した。これに温泉街も対応し、B&B形式の宿や食泊分離、スタンドバー式店舗や店の英語メニューが増えた。それがまた魅力となって若い日本人客層を惹きつけるなど、温泉地が育んだローカルで伝統的な文化と魅力を活かしたグローバル化の一つのモデルとなり得るであろう。

しかし、国内スキー客と温泉客の減少を含めた全体的趨勢は、村統計からみても「観光地利用者数」が2006年の65万2,600人から2011年は57万1,800人へ、入湯税は2006年の2,694万円から2011年の2,085万円へと減少している。村経済を支えているのが、中心的集落である豊郷地区の温泉街であることは、事業所総数526のうち宿泊飲食関係が336、その他サービスが58という数字からも明らかである。村人口は、ピーク時の1950年の6,716人から2011には3,779人に減少しており、少子高齢化という構造的問題は別にして、国際化をふまえた野沢温泉のさらなる活性化が大きな課題である。

写真　共同湯「大湯」界隈（2008年）
（筆者撮影）

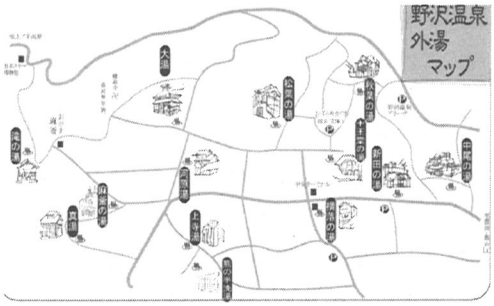


図　野沢温泉の共同湯の分布
（野沢温泉観光協会資料）

（石川理夫）

新潟県湯沢町越後湯沢温泉：スキーと小説「雪国」で知られる温泉地

1　形成

越後湯沢温泉は新潟県中央部の南端に位置する湯沢町にある。湯沢町は1945（昭和30）年に湯沢村・神立村・土樽村・三俣村・三国村の５ヵ村が合併して現在に至っている。東部から南部にかけては群馬県、西部は長野県に接し、山岳部は上信越高原国立公園に指定されている。湯沢町内には苗場や湯沢高原をはじめ多くのスキー場があり、10ヵ所程の温泉地が点在しているが、その中で最も規模が大きく、中越地方を代表する温泉地が越後湯沢温泉である。

越後湯沢温泉の開湯については、900年程前の平安時代の末に、高半旅館の祖である高橋半六翁が湯ノ沢に温泉を発見したと伝えられている。また、1801（享和３）年編纂の『新編会津風土記』に記載が見られるようである。明治19（1886）年に刊行された内務省衛生局編纂の『日本鑛泉誌』には、天和年間（1681～1684）の発見と記されており、いずれにしても永い歴史がある温泉地であると言えよう。『日本鑛泉誌』には湯沢には３軒の宿があり、浴客は１年間におよそ１万人余りと記されている。三国街道沿いに位置しており、新潟方面からは比較的容易に来湯できたと考えられるが、関東方面からは険しい山越えをしなければならなかったため、明治時代にはまだ小規模な湯治場であったことがうかがえる。

大きな転機は1931（昭和６）年の上越線の開通である。これに伴い、新たな温泉開発が次々と成功して50℃以上の高温の温泉が確保されて湯量も増加し、新しい宿が建てられて現在の越後湯沢温泉の基礎ができたのである。 また、1935年に文藝春秋に発表された川端康成の小説「雪国」の舞台となったことで、越後湯沢温泉は一躍脚光を浴びる。昭和初期に大きく発展した越後湯沢温泉は、高度経済成長期には鉄筋の宿泊施設が設置され、収容力が大幅に増大した。さらに、上越新幹線の開通と関越自動車道の開通により、首都圏からの交通の便が飛躍的に良くなったことが第２の転機である。バブル期の1980年代末～90年代初め（昭和60年代～平成初期）にかけて、苗場や岩原地区を含め湯沢町内にはリゾートマンションが続々と建設され、越後湯沢温泉の地域内にも複数のリゾートマンションが建てられ、温泉街の様相が一変した。「東京都湯沢町」という言葉が用いられ、スキーブームと相まって首都圏を中心として多くの若年層が訪れるようになった。また、この時期の特徴として、リゾートマンションは主に投資の対象であった。

2　現状

越後湯沢温泉はJR上越新幹線の越後湯沢駅西口を中心に温泉街が展開している。越後湯沢駅は首都圏方面からの新潟県の玄関口で、新幹線のほかに在来線の上越線と北陸へ向かう「ほくほく線」の起点にもなっている。西口の温泉街には旅館・ホテル・民宿などの宿泊施設とリゾートマンション、温泉入浴施設が点在し、さらに飲食店や土産物品店に加え、レトロな射的場なども点在して街区を形成している。東口にはバスターミナルがあり、駅前はアーケードの商店街となっていて、銀行や土産物店、飲食店どに加え温泉浴場も存在する。これら一帯が、越後湯沢温泉の温泉地域ととらえられている。

湯沢町内には公営の温泉浴場が６ヵ所あるが、越後湯沢温泉の地域内では、「山の湯」・「駒子の湯」・「コマクサの湯」の３ヵ所となる。山の湯は元湯地区の共同浴場で単純硫黄泉、駒子の湯は小説雪国のヒロインに因んで

名付けられた浴場で展示室も併設され、泉質は塩化物泉である。コマクサの湯は湯沢高原スキー場へのロープウェーの駅にある。民営としては、JR越後湯沢駅構内に越後の特産である日本酒を加えた「酒風呂」が楽しめる温泉入浴施設が設置され、東口商店街には「江神温泉」がある。

1970年代前半、上越新幹線の敷設工事によって越後湯沢温泉のいくつかの源泉に泉温の低下や湧出量の減少という影響を来たした。これに伴う補償で1975（昭和50）年に新源泉を確保し、さらに温泉の集中管理システムが完成し、湯沢町が事業主体となって温泉配湯事業を実施してきた。この事業が2006（平成18）年に民間移譲となり、現在は温泉事業有限会社が５～６本の源泉を利用して４系統の配湯事業を実施している。温泉は宿泊施設や入浴施設だけでなく、一部の一般家庭を含め約170軒に配湯されている。

3　課題

湯沢町の資料によると、2011（平成23）年度における観光客数は397万人で、その内訳は、スキー客が235万人（60%）、温泉客が87万人（22%）、その他が72万人（18%）となっている。観光客全体とスキー客と温泉客についての推移を図に示した。観光客が最も多いのは1995年であり、2000年には観光客とスキー客が激減しているが、温泉客は1990年度とほぼ同程度であった。さらに、2005年はスキー客が1980年のレベルまで落ち込み、観光客全体も大きく減少しているものの、温泉客は微減で留まっている。以後、2010年まで観光客全体とスキー客は減少しているが、温泉客はほぼ横ばいであった。スキー客と温泉客が湯沢町の観光客に占める割合は、観光客が最も多かった1995年が76%と14%で、高度経済成長期の1970年は58%と33%、バブル崩壊後の最低である2010年では56%と25%となっている。以上、湯沢町の観光においてスキーが最も大きな観光資源になっているが、温泉客数はそれほど大きな変動がなく推移しており、ある程度の固定客があると考えられる。したがって、グリーンシーズンから秋にかけてのレジャーのさらなる充実の検討、さらに、例えば「健康づくり」のような形で温泉を利用した連泊の仕組みを構築することによって、通年滞在型の温泉地へ移行するように配慮することが、湯沢町ならびに越後湯沢温泉の観光にとって重要なポイントになると考えられる。

写真　公営の温泉浴場「駒子の湯」
（筆者撮影）

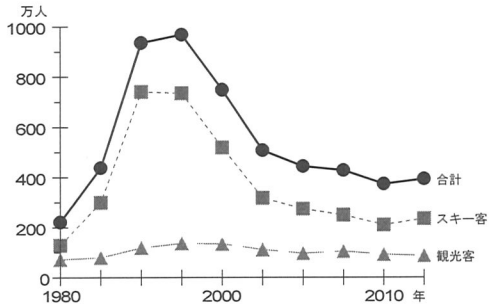


図　湯沢町における観光客数の推移
（筆者作成）

参考：内務省衛生局（1886）：『日本鑛泉誌』
湯沢町（2012）：『湯沢町町制要覧資料編』

（布山裕一）

岐阜県下呂市下呂温泉：飛騨山峡の歴史的な大規模温泉地

1　形成

岐阜県飛騨地方南部の山間部に位置する下呂温泉は、「日本三名泉」の名で知られる県内最大の温泉地である。旧下呂市街の中心を流れる飛騨川（益田川）の両岸には、50軒を超える旅館やホテルが林立し、大規模な温泉街を形成している（写真１）。

飛騨川沿いにはJR高山本線が走っており、下呂温泉はJR名古屋駅から高山本線の特急で約１時間30分の距離にある。JR下呂駅が温泉街の一角にあることから鉄道での利便性が良く、名古屋や岐阜方面だけでなく関西方面からの利用者も多い。自動車の場合、一部高速道路を利用して、名古屋から約２時間を要する。

下呂温泉一帯の地質は、白亜紀後期に噴出した濃飛流紋岩という大規模な火砕流堆積物から成り、地下で温められた温泉水は、濃飛流紋岩体の中に存在している下呂東断層の割れ目を伝って地上へ上昇して湧出している。かつては温泉街から数十km離れた場所にある御嶽山（ランクＢの活火山）が下呂温泉の熱源ではないかと考えられていたが、近年、温泉街の背後にそびえる湯ヶ峰火山が10～12万年ほど前に活動した比較的若い火山であることがわかり、地下の岩体がまだ完全に冷え切っていない可能性が高いため、現在では湯ヶ峰火山が下呂温泉の熱源であると考えられている。白鷺の発見伝説が物語るように、かつては飛騨川の河床の至る所から温泉が自然湧出していた。現在は河床付近を300m程度掘削して温泉を採取している。泉質は、いずれの源泉もアルカリ性単純温泉であり、つるつるとした肌ざわりと微かな硫化水素臭が特徴である。

下呂温泉の歴史は古く、『飛州志』その他の記載をもとに、平安時代の延喜年間（901～923）や天暦年間（947～957年）に温泉が発見されたという伝承が残る。室町時代の詩僧・万里集九は、詩文集『梅花無尽蔵』において、「本邦六十余州、毎州有霊湯、其最者下野之草津、津陽之有馬、飛州之湯島（下呂）、三処也」と記している。江戸時代には儒学者の林羅山も、『林羅山詩集第三西南行日録』の中で、「我国諸州多有温泉 其最著者摂津之有間 下野之草津 飛騨之湯嶋（下呂）、是三処也」と記しており、すでに湯治場として知られていた。江戸時代中期には、年間３万人を数える湯治客で賑わったという。

下呂温泉は、飛騨川の河床に泉源を有するため、下呂温泉の歴史は洪水との戦いの歴史であったと言っても過言ではない。洪水による泉源の埋没と再興を繰り返し、1924（大正13）年に温泉掘削が成功して以来、新泉源の掘削が続き、外来資本の参入や高山線開通により温泉地としてめざましい発展を遂げてきた。その後、大型ホテルや土産物屋、飲食店などが軒を連ねる歓楽型温泉地へ成長した。

大規模な温泉地に発展すると、旅館や個人により温泉の乱掘が進み、将来的な温泉の枯渇が危惧されるようになった。そのため、長い歳月を要して集中管理システムの導入が検討され、1974（昭和49）年に集中管理システムが導入された。現在では55℃の混合泉が旅館やホテルに安定供給されている。

2　現状

下呂温泉は、日本温泉協会が行う「最も印象の良かった温泉地」のアンケートやリクルートが行う「もう一度行ってみたい温泉地」のアンケートなどで毎年上位にランクインする人気の温泉地であり、2011（平成23）年度の宿泊客数は100万人に達している。バ

ブル景気の崩壊とともに、遊興的な団体宴会旅行から、個人や小グループ主体の旅行へとニーズが変化してきたことに合わせ、より魅力ある温泉地づくりを官民一体となって積極的に進めるとともに、全国に先駆けて「ホスピタリティー都市」を宣言している。

山々に囲まれた温泉街の中央を飛騨川が流れ、透き通った清流の流れと背後に連なる山の緑とが温泉街の景観に彩りを添えている。温泉街は、街灯やフラッグ、歩道などが統一的なデザインで整備されており、おしゃれな空間が演出されている。

温泉街には、白鷺の湯、幸乃湯、クアガーデン露天風呂といった日帰り入浴施設があるほか、10ヵ所に足湯が設けられており、温泉街を散策しながら気軽に足湯を楽しむことができる。河川敷には、下呂温泉のシンボルともいえる噴泉池（露天風呂）があり、脱衣所も囲いもない解放的な風情が人気を呼んでいる。2005年には、温泉街の中心部に全国的にも珍しい温泉専門の博物館「下呂発温泉博物館」（写真２）がオープンし、下呂温泉の新たな観光スポットとして注目を浴びている。これは、温泉を科学と文化の両方の視点から正しく知ってもらうことを目的に作られた温泉の教育普及施設であり、全国から収集した約400点以上の資料や、論文等の学術資料、温泉関係の図書が収蔵されている。

その他、温泉街には白川村より移築した合掌家屋を利用して作られた民俗資料館や影絵昔話館「しらさぎ座」などが集まる下呂温泉合掌村、紅葉のライトアップが美しい温泉寺、無料で絵手紙が描ける湯の街ギャラリー「さんぽ道」、新たなパワースポットの加恵留神社など、観光スポット点在している。また、龍神火まつりやみこしパレード、花火ミュージカルなどの祭り、飛騨牛豪快焼きが振舞われる下呂温泉謝肉際、冬の下呂温泉「花火物語」、いで湯朝市、下呂温泉ならではの食を提案するGランチ、Gグルメなど、観光客を対象としたイベントも年間を通して数多く企画されており、より魅力的な温泉地を目指した施策が積極的に講じられている。

3　課題

下呂温泉のある飛騨川筋は高速道路網から外れており、名古屋や岐阜からさらに遠方ではあるが、高速道路の通じる飛騨高山や白川郷よりも「時間のかかる所」になっている。また、団体客の減少により、大規模な温泉施設にとっては厳しい経営の現状がある。廃業した旅館は、格安均一料金チェーンの旅館へと変わり、温泉全体の料金バランスが崩れ始めている。サービスの価値を下げるのではなく、人と人とのふれあいとホスピタリティを最重視した施策により温泉地の魅力を高め、より一層、下呂温泉ブランドを確立することが肝要である。

写真１　飛騨川沿いの温泉街と噴泉池
（筆者撮影）

写真２　下呂発温泉博物館
（筆者撮影）

（古田靖志）

石川県山中温泉：伝統的な総湯広場を核に形成した温泉地の活性化

1　形成

北陸を代表する温泉郷、石川県加賀市加賀温泉郷に含まれる山中温泉は、山代、粟津温泉とともに日本の温泉地形成史上重要な一つの典型をなす温泉地である。当地の温泉寺にあたる医王寺蔵『山中温泉縁起絵巻』は行基発見伝承に始まり、鎌倉時代に当地を支配した能登の地頭・長（長谷部）氏による温泉地再興を物語っている。山中温泉が断層線に沿って約49℃の石膏泉が湧出する構造からみても、相当古くからの温泉地であることは認められているが、北陸に浄土真宗本願寺教団を広めた蓮如上人が1473（文明５）年９月入湯したことを自ら記録した『御文』が最も確かで古い文献資料である。

百姓一揆により加賀国を約一世紀自治支配した本願寺教団・一向宗衆徒が、織田信長の命で柴田勝家に鎮圧されたとき、山中温泉には軍勢の乱暴狼藉を戒めるなど温泉場の平穏を保証する禁制が1580（天正８）年８月に与えられたことも、温泉史上特筆に値する。

山中温泉では有力湯本百姓が中心となって長く自治を行い、唯一の泉源にこしらえたただ一つの共同入浴場＝惣（総）湯のある広場を核に、周囲を内湯を持たない宿や店が囲む温泉地が形成された。その基本的な広場景観は今日まで見事に保たれている。

江戸時代は加賀前田藩の支藩・大聖寺藩の下、湯番頭を置いて湯銭を納める代わりに浴場の改築修繕は藩が行った。元禄年間に芭蕉が入浴し、湯を愛でる句を詠んだのも惣湯である。宿から惣湯に入浴に行く客を案内し、浴衣を手に湯上がりを待つ娘「ゆかたべー」たちの姿は山中の風物詩となった。本来の泉源に建つ総（惣）湯「菊の湯」以外に、山中町が管理する新源泉から宿に配湯して内湯化が始まったのは1930（昭和５）年である。

2　現状

山中温泉の宿数は江戸時代の1715（正徳５）年に42軒を数えた。近年、温泉宿は25軒となり、現在は温泉宿チェーン傘下に入った３軒を含めて18軒。加賀温泉郷全体として主に関西方面からの団体慰安旅行・観光客の減退とともに宿数も減少している。そして山中温泉では、宿は中心の広場周辺には見られなくなり、大聖寺川畔・周縁部に拡散している。

市営となった共同浴場は総湯「菊の湯」が男女別に二ヵ所、総湯広場に山中の漆工芸技術の粋を集めた文化施設「山中座」、近くに「芭蕉の館」ができ、いずれも観光拠点となっている。温泉街は総湯広場を核に景勝・鶴仙渓のある大聖寺川に沿って南北に広がる。鶴仙渓にはこおろぎ橋と黒谷橋、デザインがユニークなあやとり橋が架かり、緑陰の川床に茶店の日傘の下で振る舞われる特製抹茶しるこが観光客の人気を呼んでいる。

山中温泉を代表する座敷唄「山中節」は日本三大民謡とも言われるほどよく知られている。毎年９月には山中節道中流しの催しが行われ、これに合わせて「日本海民謡祭山中節全国コンクール」も開催している。一方で、芭蕉の山中逗留にちなみ、句会を催す芭蕉祭も行われており、このように温泉の歴史、人物、温泉文化にかかわるさまざまな側面からのイベント、催しによって山中温泉の知名度と集客力を高める努力を行っている。

広場から南へ延びる「ゆげ街道」は1993（平成５）年頃持ち上がった道路拡幅計画をきっかけに地元が勉強会を立ち上げ、古い街並みの活性化に成功した事例を現地調査するなどした。宿泊客の半数が宿から温泉街に出ておらず、地元商店での購買率が14％まで低下しているという現状の打開、商店街の活

性化をめざしたものである。そして現状に即して日中に徹し、漆など伝統工芸文化を育んできた山中温泉ならではの芸術性の高い品目・業態を扱う「一店舗二業態」導入をはかった。ゆげ街道では同時に建物の色や高さ、看板を規制して景観保全をはかるために景観形成審議委員を設けている。この結果、散策する人の数が3倍増し、入込客数も1日あたり2,600～3,000人に増加した。

女将の会「ぽたん会」も2012年に結成60周年を迎え、温泉街全体のおもてなし向上に取り組んできた。年に2回独自にタウン誌を発行し、桜の植樹に始まる緑化運動などを続けている。

また、温泉街を回遊するバス「お散歩号」には、商店主、旅館主など60名ほどが研修会を経て登録する地元ボランティアガイドが当番で同乗している。観光客と直接対話をする目的で始めたボランティアを務める側にとっても、地元、温泉街のことを学ぶ良い機会となっている。

3　課題

日本温泉協会がまとめた「温泉地宿泊者数ベスト100」統計によると、山中温泉の宿泊者数はバブル崩壊前の1990年が約66万人だったのに対して、2006年が約65万人、2009年が約51万人と、この20年間50～60万人台で推移している。加賀温泉郷でも山代温泉（別所新加賀温泉の施設含む）が1990年の約158万人から2009年の約73万人へ大きく減少しているのとは対照的である。これはより閑静で自然景観と温泉街景観のバランスを保つ山中温泉のほうが、景気に左右される団体客より温泉志向、保養志向の個人客の割合が多いことによると思われる。

現状で述べた山中温泉のゆげ街道の店舗活性化、景観整備もこうした志向に沿ったものであった。関西・中京圏とのつながりが強い加賀温泉郷・山中温泉だが、今後の北陸新幹線金沢延伸によって首都圏その他からの来訪が拡大することが予想される。温泉地全体で培ってきたおもてなしの努力の成果が問われることになるであろう。

加賀温泉郷で今日、山代温泉は観光客向けと地元向け「総湯」が二つ建ち並ぶ構造となり、片山津温泉では総湯名称が消えて「街湯」に代わる事態が生じている。その中で伝統的な総湯広場を核にした温泉地という一つの典型構造を山中温泉が保つ意義は大きい。

表　山中温泉の発地別観光客数

発地＼年次	2000	2010	2011
県　内	71,402	85,276	81,851
隣接県	48,077	71,694	72,786
関西圏	206,047	201,731	182,373
中京圏	103,739	85,757	84,356
関東他	98,803	113,014	104,016
総数	528,068	557,472	525,382

加賀市統計による。隣接県は福井・富山県。

山中温泉の菊の湯
（筆者撮影）

（石川理夫）

和歌山県白浜町南紀白浜温泉：日本三古湯のある関西有数の温泉地

1　形成

紀伊半島の南西部に位置する白浜温泉は紀伊山地を背景に温暖な黒潮が海流する太平洋に面しており、年間を通して比較的温暖な気候に恵まれ、数々の景勝地も多く、大正、昭和の時代から関西の奥座敷としての地位を確立してきた温泉地である。交通のアクセスはJR紀勢本線で大阪から約２時間、白浜駅からは車で10分程で白浜温泉の街中に到達する。白浜空港があり、東京羽田空港から約１時間の飛行で到着する。さらに、数年前からは高速道路の紀伊半島南下が進み、阪和高速道田辺インターを下車して15分ほどで白浜温泉に到達する。

白浜温泉の歴史はかなり古く、日本の歴史に初めて登場するのは『日本書紀』、および『続日本書紀』までさかのぼる。文献によれば、有間の皇子が牟婁の出湯に来られ、とても良い温泉だとおほめになり、四方の天皇が来られたことがはっきりと記されている。その後、江戸時代に入ると、徐々に湯治場としての形がととのえられた。

第２次世界大戦後は温泉ブームの影響もあって、宮崎に次ぐ新婚旅行のメッカとなり、有馬温泉、別府温泉とともに日本三大温泉地として発展の経路をたどって今日にいたっている。特に、1950年代半ば（昭和30年代後半）から大規模旅館、民宿などの宿泊施設、別荘や各企業の保養所なども急速に増加し、町全体の人口も増え、昭和の後半まで白浜温泉としての全盛期の時代を迎えることになった。

2　現状

昭和の後半から平成時代になり、時代の流れとともに旅行者のニーズも徐々に変化してきた。白浜温泉も日本を代表する大規模温泉旅館を核とした温泉観光地に留まることなく、リゾート温泉観光地として変容することになった。なかでも、ジャイアントパンダの国内最大の頭数を誇る複合型遊園施設であるアドベンチャーワールドのオープン、ゴルフを組み込んだホテル宿泊ツアー、さらに近年ではスキューバーダイビングやウインドサーフィンなどのマリンスポーツ、若い世代による海水浴客の増加など、今の時代を象徴するような体験型の観光旅行が定着している。これらのリゾートに加え、根強い温泉に対する人気から街中の足湯、町営や民間企業の運営する外湯も充実している。

そしてまた、白浜町の観光協会などが中心となり、夏のしらら浜花火大会、ビーチフットボール大会、砂まつり大会、埋蔵金探し、冬のしらら浜イルミネーションにカウントダウン花火、春には平草原公園の二千本の桜祭りなど、年間を通して様々なイベントが開催されている。さらに、2014（平成26）年には熊野古道の世界遺産登録10周年を迎え、2015年には高野山開創1200年を迎える。また、同年に紀の国わかやま国体の開催を控えており、和歌山のゴールデンイヤーに向けてさらに多くの観光客の来県を期待している。

しかし、その一方で平成時代へ入ってのバブル崩壊の影響は非常に大きく、各企業の保養所の相次ぐ閉鎖には歯止めがかからず、全盛期には百数十件あったその数も今では３分の１から４分の１にまで減少している。さらに、個人が所有する別荘などの売却、宿泊客減少により閉鎖に追い込まれるホテルなど、現時点においても大変厳しい状況が続いているのが現状である。

3　課題

白浜温泉としての今後の課題は多くある

が、その２つ３つに絞って述べる。

時間の経過とともに徐々に高速道路の南下が進み、京阪神方面からの車による移動時間が非常に短縮してきている。それによって、以前のようなツアーの形態とはだいぶ様相が変わってきている。今までのように、単に白浜温泉だけというようなピンポイントの観光ではなく紀南地方全体の各温泉地や観光地との連携したツアーを企画するなど、点から線、さらに面でとらえるような広域観光に重点を置いて対応していかなければならないと考えられる。いわゆる世界遺産でもある高野山、熊野古道を背景に龍神温泉、本宮、那智勝浦などを一つのくくりとし、さらに近い将来には伊勢神宮などとの連携も視野に入れた観光の形になっていく事が必要となってくるであろう。

一方、白浜温泉内部に目を向けてみると、昭和の時代につくられた大規模なホテル、旅館などの老朽化が進んでおり、その建て替えや大規模な改修工事の必要性が出てきているのである。この点が、今後さらに大きな問題となっていくと考えられる。現在の厳しい現状では、巨額の資金を費やすことも、資金を調達することさえも非常にむずかしく、と言って巨大な建物は意匠的にも設備的にも時代に合わなくなっている。今後は、例えば低金利な公的資金の調達、または景観条例を利用した街並み整備のための補助金など、早急に何らかの手段を講じていかなければ、さらに廃業に追い込まれるといったケースが増えていくと予想される。

これらのことは、白浜温泉がもともと先天的に与えられた自然環境などが大変素晴らしいものであったが故に、黙っていても客が来た時代が終わり、気がついてみると温泉観光地としての街づくり、街並みづくりが何も出来ていなっかたという点にも結びついている。時間のかかることであるが、今後早急に前述の建替えや改修ともあわせて、さらに観光客の目線に立った、癒しを感じられる温泉地づくり、観光客が非日常を感じることのできる街並みづくりを心がけていかなければ、将来は大変厳しいものになると考えられる。

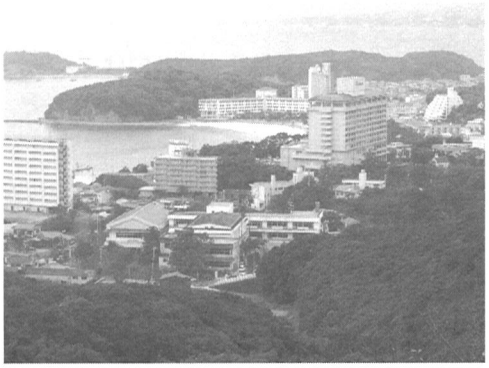


写真１　白浜温泉の景観
（山村順次撮影）

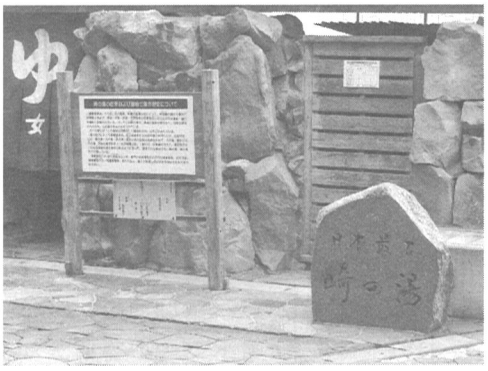


写真２　日本最古の崎の湯
（山村順次撮影）

（小野寺安信）

兵庫県神戸市有馬温泉：歴史文化と金泉・銀泉に浸れる日本の代表的温泉観光地

1　形成

有馬温泉は行政的には兵庫県神戸市北区に位置する。温泉集落は六甲山地の北側の紅葉谷の麓を中心に展開し、標高は350mから500mの地点に位置する。ただし、高度経済成長期以降、開発が進むことで、温泉集落の範囲が拡大している。2013（平成25）年1月現在、有馬温泉の旅館26軒（その内、1軒休業中）を数える。

有馬温泉の歴史は古く、大巳貴命と少彦名命の発見と言われる。『風土記』『日本書紀』『万葉集』などに登場し、『日本書紀』には631（舒明天皇3）年、舒明天皇が湯治をしたという記録が残されている。温泉行幸の最初の天皇と言われ、有馬温泉は日本三古湯、日本三名泉に数えられる。奈良時代の724（養老8）年、行基が有馬を訪問した言い伝えも残されている。行基は「開創の行基」と称される。

中世になると、1097（承徳元）年、有馬では大洪水が発生し、温泉や人家などが荒廃した。1192（建久2）年、仁西上人（大和吉野郡川上村の僧）がお告げを受けて、平家の残党12人を引き連れて有馬にやってきた。そこで、12坊舎を建てて湯戸（湯宿）を営業し、有馬温泉が復活したのである。仁西は「中興の仁西」と称される。現在の温泉寺は、724（養老8）年に行基が薬師堂として創建し、1191（建久2）年に仁西が復興した。その後、1528（享禄元）年と1578（天正4）年の大火によって、有馬は衰微したが、1585（天正13）年、豊臣秀吉が有馬に入湯した。その際、泉源の改修、浴場や寺院の改築を行い、従来の12坊に新たに8坊を加えて温泉集落の拡大を行った。秀吉は「再建の秀吉」と称され、江戸末期の温泉番付では、西の最高位である大関に地位を占めており、名湯であることを証明している。

明治期に入ると、有馬は谷崎潤一郎・与謝野晶子など文人墨客が多数訪問し、湯治場から保養温泉地へと変化を遂げた。神戸の居留地の関係で外国人も多数来訪し、明治末期には外国人向けのホテルが開業している。これには交通機関の近代化が影響している。1915（大正4）年、三田－有馬間に鉄道が開通したが（開通と同時に鉄道院の所管となる）、戦時下の1943（昭和18）年に廃止した。さらに、神戸有馬電気鉄道（現在の神戸電鉄有馬線）は、1928年に神戸湊川―有馬温泉間を開通し、神戸からの利便性を高めた。また1932年には六甲ケーブルカーが開通した。

1947年、有馬町は神戸市に合併し、神戸市兵庫区有馬町となった。1949年10月には、有馬温泉観光協会を設立することで観光宣伝活動が活発化した。神戸そして関西の奥座敷として機能し、高度経済成長期を通して発展を遂げたのである。

終戦後から大阪万博までの時期は、大阪資本の進出が目立ち、旅館の大型化が進んだ。高度経済成長期は、他の温泉地同様に業績を伸ばしたが、1973年の石油危機、さらには1995年の阪神・淡路大震災後は停滞傾向を余儀なくされた。

2　現状

有馬と言えば、金泉と銀泉が知られる。現在、外湯として整備され、金泉は2002年12月、銀泉は2001年9月に新しく開業した。金泉は外湯として古くからあった元湯が新装されたものである。ところで、2006年、神戸市は『神戸市有馬温泉地域活性化事業・基本構想策定調査報告書』をまとめた。これによると、有馬温泉の泉質や適応症を分析し、

温泉療養・食事療養・運動療養・環境療養の４本柱からなる健康づくりプログラムを掲げている。有馬温泉サイドでは、「入浴の時代から療養の時代」を意識し、宿泊プランなどを取り入れて、実行に移している。

近年、有馬では新しい動きが現れている。その一部は有馬温泉路地裏アートプロジェクトである。2012年で第３回目を迎え、７月１日から11月23日まで開催された。回を重ねるとともに応募者は増加し、その中から３ヵ国のヨーロッパを含めて10名の作家が選ばれ、国際化したのである。旧温泉集落の路地裏には作家によるオブジェが点在し、観光客は周遊を楽しむイベントである。さらに、有馬ではボランティアガイドが2004年４月にスタートした。その後、予約制の有馬温泉観光ガイドが始まり、観光スポットを約２時間で案内することになった。主なコースは次の通りである。集合場所（ねね橋又は太閤橋）・善福寺・金の湯・御所泉源・温泉寺・極楽寺・太閤の湯殿館・念仏寺などとなる。単なる宿泊だけでなく、街を歩いて歴史や文化に浸る傾向が根付きつつある。

３　課題

関西の奥座敷として知られる有馬であるが、2010年以降、その地名と暖簾を利用した新しい宿泊施設が開業した。会員制リゾートクラブの有馬六彩・有馬六彩VIARA（東急ハーヴェストクラブ）やエクシブ有馬離宮である。その結果、有馬温泉の旅館の客室数は約1,300室から1,600室へと２割以上の増加となり、過当競争を来たすことになった。関西を代表する名湯の宿命であろうが、従来の温泉旅館のシステムを壊すことだけは避けたいものである。

一方では、有馬は敷居の高い温泉旅館が多いと思われている。「入浴の時代から療養の時代」を目指すなら、貸間旅館や湯治旅館などロングステイが可能な旅館を整備すべきであろう。

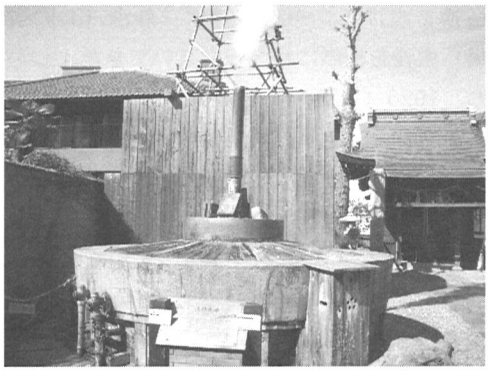


写真１　有馬温泉の源泉
（筆者撮影）

写真２　足湯
（筆者撮影）

参考：山村順次（1998）『新版　日本の温泉地　その発達・現状のあり方』日本温泉協会。
温泉観光実践士養成講座実行委員会（2012）『温泉の正しい理解と温泉地の活性化－第３改訂版－』観光学研究所（大阪観光大学）。

（浦　達雄）

兵庫県豊岡市城崎温泉：外湯めぐりとカニで知られる北近畿の温泉観光地

1　形成

城崎温泉は行政的には兵庫県豊岡市城崎町に位置する。城崎町は2005（平成17）年、豊岡市・竹野町・日高町・出石町・但東町と合併して豊岡市となった。その結果、市域は拡大し、2010年の総人口は8万5,592人で、城崎地区は3,778人を数える。温泉集落は、円山川下流の海岸に近い支流の大谿川に沿って街並みを形成している。2013年現在、組合加入旅館は73軒を数える。

温泉の歴史は古く、7世紀前半、舒明天皇の時代にコウノトリが傷を癒したことから温泉が発見されたとの伝説がある。奈良時代初期の720（養老4）年に、道智上人が難病の人たちを救うため千日の修行を行った満願の日に、曼荼羅の湯が湧出したとされ、738（天平10）年、同上人は温泉寺を開基した。温泉寺は聖武天皇の庇護のもと、温泉の守護寺となった。

江戸時代になると、漢方医薬の後藤艮山が城崎温泉の科学的温泉療法を研究し、その弟子である京の医師・香川修徳は1738（元文3）年、艮山の研究成果を踏まえてわが国初の温泉医学書「一本堂薬選続編」を出版した。修徳が「海内第一泉」と評価した一の湯を中心に温泉集落が形成された。そして、1808（文化4）年、柴野栗山が風光と療養の地として推奨し、知名度がアップした。江戸時代末期の温泉番付によると、城崎は西の関脇にランクされ、これに対して、有馬は最高位の大関であった。江戸時代後期の旅館は大小合わせて10軒ほどであったが、明治時代になると60軒に増加した。

明治初期には、一の湯・神湯・常の湯（上の湯）・御所の湯・曼荼羅湯・鴻の湯・裏の湯・地蔵湯の共同湯があった。湯島財産区の外湯として利用され、地元住民とともに観光客にも供された。　1909（明治42）年に山陰鉄道（現在のJR山陰本線）城崎駅が開設され、その結果、入湯客が急増した。それまでは6湯19槽であった外湯（共同浴場）を6湯38槽とし、旅館は新築・増築が行われ、大正時代に入ると、宿泊客がさらに増加した。

明治期以降、文人墨客が城崎を訪問した。日清戦争では、負傷した兵士を湯治させるために療養所が設置された。文人墨客の代表は志賀直哉である。1913（大正2）年、怪我を癒すための湯治で城崎にやってきた直哉は、三木屋に逗留した。1917年5月、白樺派の同人誌「白樺」に発表された短編小説「城の崎にて」は、逗留の成果である。その他では、有島武郎・与謝野晶子などが訪問している。

ところで、城崎の旅館は、内湯（旅館内に浴槽を設ける）を付帯せず、外湯（共同浴場）主義を長年にわたって貫いてきた。しかし、1925（大正14）年5月23日に北但大震災が発生し、温泉集落を焼き尽くしてしまった。そのため、震災後の城崎に入浴客を誘致するため、1927（昭和2）年に、ある高級旅館が内湯の設置を図ったことから、その後、内湯問題が発生し、23年間に及ぶ抗争が続いた。1950年、泉源は財産区で管理し、内湯・外湯の併設を認めることになって和解が成立した。

温泉の集中管理は、高度経済成長期の大量観光に対応するために、1956年10月に実施された。その結果、各旅館に内湯が導入された。1989（平成元）年、外湯総合基本計画が策定され、魅力ある外湯を目指して、鴻の湯・地蔵湯・一の湯・まんだら湯・さとの湯・御所の湯が新しくなった。

2　現状

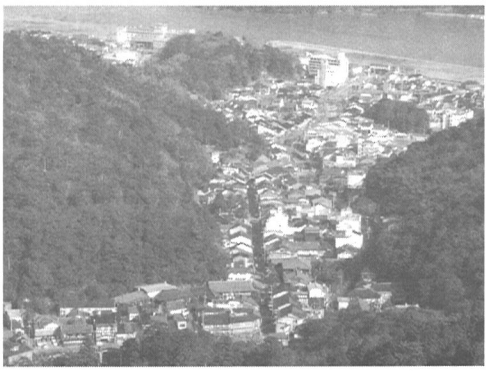
城崎のキーワードは文学と歴史・デザイン浴衣・カニ王国・外湯などである。７つの外湯は、旅館に宿泊すれば無料入浴が可能で、外湯めぐりの走りと言われている。さらに、大半の旅館では女性客に対してデザイン浴衣の着用をサービスしており、女性がカラフルな浴衣で街を歩く様は、城崎の新しい風物詩として定着した。

街歩きと言えば、そのツールとして「ゆかたとカニ王国のパスポート」（価格は200円。１年間有効）が重宝である。1999年（平成11）４月に街歩きを楽しむツールとして登場したこのパスポートは、割引クーポンとして機能し、協賛店では様々なサービスが受けられる。お薦めの観光モデルコースには、外湯・文学碑めぐりコース、ギャラリーめぐりコース、陶芸体験・サイクリングコース、名所めぐりと麦わら細工体験コースが設定された。所要時間は２時間30分から４時間であり、温泉＋αの魅力を醸し出している。

3　課題

城崎温泉と言えば、カニのイメージが定着して久しい。宿泊客はカニを食する者が大半で、シーズンの冬場は活況を呈している。しかし、カニ以外では但馬牛が登場するが、カニを超える料理商品としては定着していない。温泉旅館の立場からは、料理商品としてカニ＋αで魅力アップを図ることが課題である。

次は、ネットワーク観光の確立である。周辺には魅力的な観光地が多く点在するので、ネットワーク観光を推進したい。城下町の出石町（豊岡市に含まれる）を始め、舟屋で知られる丹後半島の京都府伊根町などは有力な観光資源を保有しており、これらの観光地をめぐり、城崎に数泊滞在するロングステイ観光を意図すべきである。



城崎温泉の全景
（筆者撮影）

外湯の一の湯
（筆者撮影）

参考：山村順次編著（2010）『観光地理学　観光地域の形成と課題』同文館出版。
温泉観光実践士養成講座実行委員会（2012）『温泉の正しい理解と温泉地の活性化－第３訂判－』観光学研究所（大阪観光大学）。

（浦　達雄）

岡山県真庭市湯原温泉：大露天風呂・砂湯で知られる中国地方の保養温泉地

1　形成

湯原温泉は、行政的には岡山県真庭市に位置する。2005（平成17）年３月、４町５村の合併によって、湯原町は真庭市となった。温泉集落は、蒜山高原から流入する旭川沿いに展開し、湯原温泉郷を形成している。北から湯原・下湯原・足・真賀温泉、そして支流の鉄山川沿いに郷緑温泉がある。2013年１月現在、湯原温泉郷の組合加入の旅館は20軒を数える。

湯原温泉はこうした温泉郷の中核を占め、奥津・湯郷と共に美作三湯を構成している。

湯原温泉の歴史は古く、古墳時代までさかのぼる。一帯は「たたら製鉄」の盛んであった場所で、たたら製鉄に関する史跡、そして金山（なかやま）（製鉄後の屑を積んで出来た小山）が多く存在している。労働者は湯原温泉で湯治をしたと推測される。

さらに平安時代になると、播磨国（現在の兵庫県南西部）の書写山圓教寺の僧・性空上人が重病で倒れ、その時、夢枕に天童が現れて、この湯を暗示したとされている。性空は温泉に出向き、湯治によって平癒し、それ以後、薬湯として広く知られるようになった。

豊臣時代では、大老の１人の宇喜多秀家の母親（おふくの方）の病が湯治で治癒し、その御礼に秀家が浴室を修繕したという逸話も残されている。中でも真賀温泉は江戸時代に津山藩主の共同浴場が設置された。共同湯である真賀温泉館の幕湯はその名残りで、藩主が幕をかけて、貸切にした浴場として知られる。

明治期以降、昭和戦前まで湯原は近隣の湯治場として平静を保ったが、第２次世界大戦後はダムの建設で、多数の労働者が入り込んで活況を呈した。その結果、1955（昭和30）年に湯原ダムが完成し、湯原ダム直下の露天風呂「砂湯」が整備された。河床、つまり湯船の底の石や砂利の間から温泉が砂とともに自然湧出しており、砂湯と称されている。

第２次世界大戦後、1956年にいち早く国民保養温泉の指定を受けた。岡山県内では最初の指定であり、中四国地方では、前年指定の三朝（鳥取県）、湯来（広島県）、俵山（山口県）に次ぐものである。なお、三朝は1969年に指定を解除している。1998年には、「ふれあいやすらぎ温泉」の指定を受けている。国民保養温泉地の関係で、1960年に湯原温泉病院が開業し、1966年には緊急病院の指定を受けた。現在の診療科目は、内科、外科、整形外科、神経内科、皮膚科、リハビリテーション科、放射線科で、一般病棟50床、療養型病棟55床ある。2005年３月、現在地へ総工費43億円で移転・新築した。その結果、温泉の物理的効果（浮力作用）を活用した運動浴や歩行浴などのリハビリが行われるようになった。

1981年、旅行作家の野口冬人が行司役をした露天風呂番付で、湯原は西の横綱にランクされた。選考基準は利用の有料・無料、公共性、管理、周辺環境などである。ちなみに、東の横綱は宝川温泉（群馬県）である。

2　現状

21世紀に入って、湯原は新しい動きを見せた。具体的には、温泉指南役養成セミナー、湯けむりドックなどがある。こうした活動の一環として、2004年６月16日、湯原町旅館協同組合は、第７回「人に優しい地域の宿づくり賞」において、最優秀賞の「厚生労働大臣賞」を受賞した。中国地方では初めての受賞となった。

温泉指南役は、2002年から準備に取りかかり、2003年５月に第１回の温泉指南役養

成セミナーを実施した。宿泊施設、飲食店、土産品店、マッサージ師などに呼びかけ、行政の福祉担当者も加えた38名が受講した。温泉についての一般的な知識と健康、療養への利用方法、さらに風呂場での緊急時の対処方法（蘇生術）、湯原温泉の特徴やその歴史、観光ガイドとしての知識まで取り入れた研修を行った、講師は温泉療養医・療養運動士・地元歴史研究家・消防救急隊員などが担当した。受講後は温泉指南役のライセンスを認定する。

湯けむりドック（前のホットドックプラン）は人間ドック付き宿泊プランで、2004年6月に開始した事業である。医療と観光の連携事業であり、湯原温泉病院と連携し、人間ドックと湯治をセットしたものである。これは健康増進目的（湯治）で来訪した顧客を対象として病院で人間ドックを行い、旅館サイドは、受入時間・食事の配慮、そして送迎を行う事業である。病院内では空き時間を利用して温泉指南役の講座を行なっている。費用は夕食なしのプランなら2万9,000円から、朝夕食付きのプランは3万5,650円からとなる。

3　課題

湯原温泉の課題の1つは、関西圏からの公共交通アクセスである。鉄道を利用すると、JR姫新線中国勝山駅下車で、その後、コミュニティバスの利用で約35分を要する。バス利用だと、岡山駅から2時間30分、大阪駅から津山駅まで約2時間50分、津山からは、その後は乗り換えとなって、アクセスの良い直通の高速バスは存在しない。大阪は貴重な観光市場であり、効率的な高速交通体系の整備が待たれる。

そして、人気の砂湯であるが、混浴のため女性の利用が限定される。独特の景観、開放感溢れる砂湯は、湯原最大の観光資源である。バスタオル利用の入浴よりも情緒ある湯浴み着を利用した入浴をすすめたい。

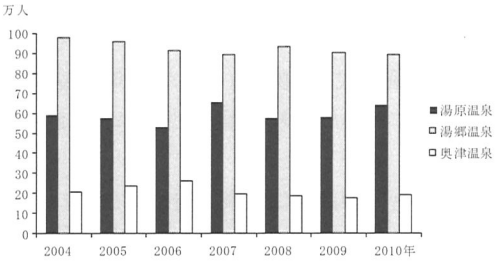


図　美作三湯における湯原温泉の地位
（筆者作成）

写真　冬の露天風呂・砂湯
（筆者撮影）

（浦　達雄）

愛媛県松山市道後温泉：歴史と文化の色濃い四国唯一の伝統的温泉地

1　形成

四国地方には温泉地が少ないというだけではなく、松山市の道後温泉を除いて有力な温泉地はないといっても過言ではない。しかし、この道後温泉は古代の温泉地として、有馬温泉、白浜温泉とともに「日本三古湯」に位置づけられるほどの有名な温泉地である。『伊予国風土記』の逸文の中で、「湯の郡」（道後温泉）について、この温泉は豊後国別府温泉から豊後水道の海底に管を通して引湯したものであること、大己貴命（大国主命）が重病の少彦名命をこの湯に浸けたところ、たちどころに元気になったとの神話を伝えている。その際、少彦名命が立ち上がった石が「玉の石」として、道後温泉本館横に祀られている。

また、『伊予国風土記』には聖徳太子が596（法興６）年に僧恵慈と葛城臣を従えて道後に来たことが記されており、太子は温泉の効験を得たことから、伊佐爾波岡に温泉の碑を建立したと伝えられる。このわが国最古の金石文には、「天には月日が照り、地上では温泉が湧いてあまねく人々に恩恵を与えている。極楽浄土と同じである。人々は入浴をして病を治し、温泉を囲んで椿の花が咲き誇り、鳥はさえずって地上の楽園である。この温泉を大切に守り育てることが根本精神である」と記されている（松山市誌）。さらに、『日本書紀』は、天皇の温泉行幸の嚆矢とされる舒明天皇をはじめ、斉明天皇と中大兄皇子、大海人皇子などの道後への長期の温泉行幸があったことを記している。

中世の温泉の経営は地方の豪族がこれに当たり、領内の寺院に実務を任せた例が多いが、道後温泉では、豪族の河野氏が伊佐爾波岡に温泉館を設けた。その後の変遷を経て、江戸時代初期に松平定行が入府して以後、温泉場中央の共同浴場が修築され、温泉を垣で囲い仕切り石で３槽に分け、一之湯は士人僧侶、二之湯は婦人、三之湯はさまざまの男子が入ることにし、廃湯は牛馬の洗い湯とした。大名が入浴するときは「幕湯」といって幕を張り、貸切湯とされた。共同浴場を中心に温泉宿が建ち並び、1809（文化６）年には53軒を数えるほどに大規模な温泉町を形成していた。道後ではたびたび地震があり、数ヵ月間も温泉が止まる事態に遭遇することが数回もあったが、その度に湯神社・伊佐爾波神社に祈願した。とくに、1854（安政元）年の地震では85日間も湯が止まったが、町民はこぞって神に祈り、94名の若者が道後と三津浜間の２里余りを往復して必死の「潮垢離」を124日も続けて、幸いにも温泉が湧出したと言われる。

明治時代の道後温泉は、夏目漱石の小説「坊ちゃん」の舞台として知られる。漱石が松山中学に赴任した前年の1894（明治27）年に共同浴場の道後温泉本館が落成した。その豪華な建築様式は1994（平成６）年、温泉浴場として日本で最初の重要文化財に指定された。

大正～昭和前期は東京周辺や西日本の温泉地の観光化が進み、道後温泉もこの流れに沿って発展した。

2　現状

第２次世界大戦後、道後温泉の発展にとっての大きな問題は、増加する観光客に適正な湯量をいかに確保するかということであった。終戦直前に道後湯之町が松山市に合併して財産区が設けられ、温泉の管理、運営を任せられた。４つの源泉から14ヵ所の共同浴場に配湯していたが、旅館の内湯化は時の流れであり、内湯を望む有力旅館主達は共同で温泉の新規掘削を推進して多量の単純温泉を

確保した。そのために道後温泉本館の客が減少したので、財産区では守り神の温泉神社を移動させてヘルスセンターを開設したが、その後、大規模なレジャーランドの奥道後温泉が開発されて閉鎖を余儀なくされた。

道後温泉本館には、入浴客の大半が利用するメインの「神ノ湯」をはじめ、「霊の湯」や皇室専用の又神殿、太鼓で時刻を知らせる振鷺閣、漱石に因む坊っちゃんの間、浴衣でくつろげる2階の休憩室などがあり、温泉客に高く評価されている。

近年の入浴者数は毎年約110万人にのぼり、そのうち一般客が70％、回数券客が30％であり、月別には観光客の多い8月をピークに5月と3月が続いている。

3　課題

道後温泉本館は、見事な和風建築の共同浴場として日本を代表するシンボル的存在である。松山市を観光する多くの客は、この温泉浴場に入浴することを目的にしている。しかし、道後温泉は歴史的に日本を代表する温泉地であり、数々の歴史上の人物で彩られているにもかかわらず、多くの観光客は温泉入浴のほかは土産店街での買物や松山城訪問に時間を費やしている。本館脇に古代の温泉伝説に由来する「玉の石」があること、「椿の湯」の命名は聖徳太子の碑文に関係していること、温泉の量が比較的少ない中で温泉関係者は温泉資源の開発と保護に尽力してきたことなどを、ボランティアガイドが解説する体制を整えてはいるが、さらなる積極的な対応が求められる。神話では道後温泉と別府温泉との関係が深いので、両温泉地の交流を深めることも検討すると良いであろう。

写真　道後温泉本館
（筆者撮影）

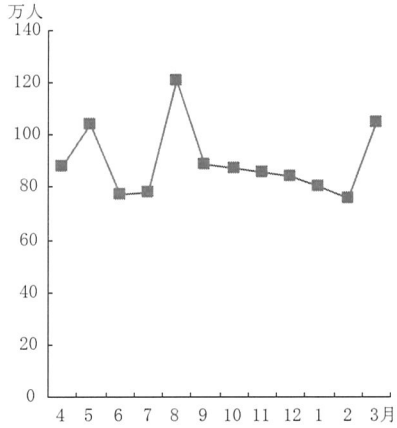


図　道後温泉本館入浴客の季節性
（筆者作成）

（山村順次）

大分県別府市別府温泉郷：
地獄・砂湯や湯煙で知られる日本最大の温泉郷

1　形成

大分県別府市の市街地を中心に広がっている別府温泉郷は，日本最大の温泉地域である。市街地の西に鶴見岳が聳え、火山性扇状地が形成されて別府湾に突入している。その緩傾斜地に別府、浜脇、観海寺、堀田、明礬、鉄輪、柴石、亀川の別府八湯が展開し、別府温泉郷を構成している。古代の『豊後国風土記』には河直（鉄輪）の地獄地帯の様子が記され、赤湯（血の池地獄）の記述もある。また、別府地域の呼称は敵見郷（熱海）で温泉を意味しており、平安時代に朝見郷となり、宇佐神宮の荘園となって以後は竈（かまど）荘、石垣荘、朝見荘に分かれた。そして、石垣荘内の南部が開墾されて本荘の官省符とは別の免符を受けた別符、すなわち別府が成立したという。

17世紀後半、別府地域の大部分は江戸幕府の直轄領となり、大分の高松代官の支配を受けた。1692（元禄7）年の貝原益軒の『豊国紀行』には、「別府は石垣村の南に有。町にて民家五百軒斗、民家の宅中に温泉十所有。何れもきよし。…町半に川有。東へ流る。此川にも温泉湧出。其下流に朝夕、里の男女浴す。又海中にも温泉いづ。潮干ぬれば浴するもの多し。潮湯なれば殊によく病を治すと云。」と紹介されている。19世紀初頭の文化年間、温泉利用権の湯株を有する22戸の宿屋があり、温泉番付では、浜脇温泉が西前頭3枚目、別府温泉が同6枚目であった。

別府温泉は、明治中期に上総掘りの温泉掘削が導入されて開発が進み、北九州の客や瀬戸内航路を経由する関西方面からの客が多数訪れるようになった。愛媛県や県内各地からの流入者が増加し、北九州の財界人が別荘を建築して外来者が根付いた。明治末期には大分県が鉱泉取り締まり条例を出して温泉の乱開発を規制するほどであった。大正時代には、温泉付別荘地が分譲され、1924（大正13）年の市制後、油屋熊八の経営する日本初のガイド付き地獄めぐりバスが運行され，市街地の区画整理も実施されて温泉観光都市へと発展した。地熱地帯の鉄輪温泉では、温泉開基の一遍上人が作った「蒸し湯」があり、石菖（せきしょう）を敷いた室の中では、湯治客がお経を唱えて病気の回復を願った。入湯貸間と呼ぶ滞在型の自炊湯治宿が発生し、湯治客は温泉蒸気を利用した地獄釜を使って自炊をした。第2次世界大戦後、観光ブームで次々にやって来る団体客に対応して海岸部の旅館が大型化し、観光化が促進された。旅館内に売店や食堂が併設され、宿泊客が温泉町に出ることが少なくなり、共同浴場や商店街は客足が減って温泉地域の空洞化が顕著となった。

2　現状

低成長期に入り、旅館業者や市民が別府温泉の歴史的意義を再発見する活動を起こした。別府観光の目玉である「地獄めぐり」に依存するだけでなく、和風共同浴場として価値の高い街中の竹瓦温泉をアピールし、その周辺の路地裏を観光客に案内するようになった。別府八湯のひとつ鉄輪温泉では、温泉情緒を醸し出す湯煙景観を前面に出し、NHKによる「21世紀に残したい日本の風景」の投票で、全国第2位にランクされた。また、明礬温泉でも地熱地帯の湯花小屋が建ち並ぶ光景が、観光客を引きつけることになった。別府温泉郷は福岡、北九州、広島の百万都市に近く、鉄道、高速道路、航路、空港などの交通の利便性も高い。1960年代～70年代半ばの高度経済成長期には，団体客が全体の約70％を占め、男性客が多かったが、現在では家族客や小グループ客が中心であり，女性客も多い。観海寺温泉の一大リゾートのス

ギノイホテルは、福岡方面から多くの客を送迎している。2010（平成22）年現在、別府温泉郷は源泉数が約2,200、毎分温泉湧出量は83,000Lもあり，いずれも全国第1位で他を圧倒している。泉温42℃以上の高温源泉率は82%に達する。泉質は放射能泉と単純炭酸泉を除くすべてが存在し、様々な温泉を楽しめ、共同浴場は131ヵ所もあり、特殊な砂湯や蒸し湯も体験できるのである。

3　課題

2010年の別府温泉郷の観光客数は790万人におよぶが、宿泊客数は230万人で宿泊率は29%に留まっている。外国人は韓国21万人で、台湾の1万3,000人、中国の9,000人を引き離しているが、今後は東南アジアやオセアニアなどの太平洋諸国への誘致活動は欠かせない。また、別府の温泉資源のユニークさを学ぶ修学旅行生が4万人弱にすぎないことも問題である。宿泊率の低下は、近くの著名な由布院温泉や黒川温泉などとの競合の結果でもあるが、別府温泉郷の多くの魅力が活かされていないことが大きな要因である。

また、鉄輪、明礬、柴石温泉は環境省の国民保養温泉地に指定されて、落ち着いた雰囲気の保養環境が整備されたが、いずれも日帰り客が多く、滞在型保養客の受入体制作りが急務である。近年、ボランティアガイドが市内各所で組織されてはいるが、観光客に十分な対応ができているとは言えない。温泉地域の存立条件、すなわち温泉客が求めている志向性は、温泉資源、温泉情緒、自然環境の良さにあり、その対策を再検討することが急務である。

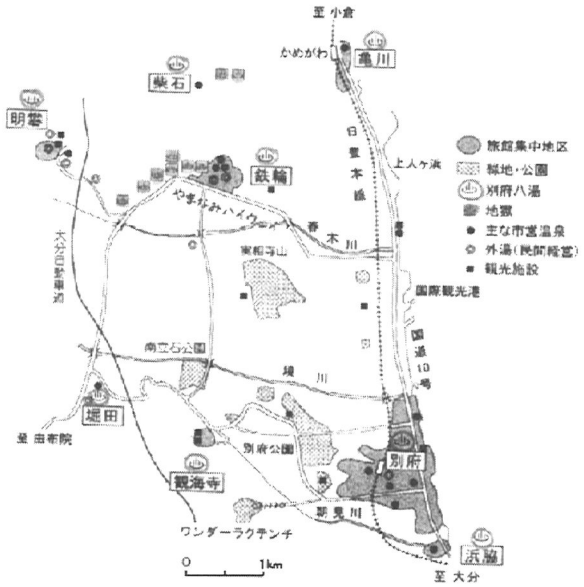


図　別府八湯の分布
（筆者作成）

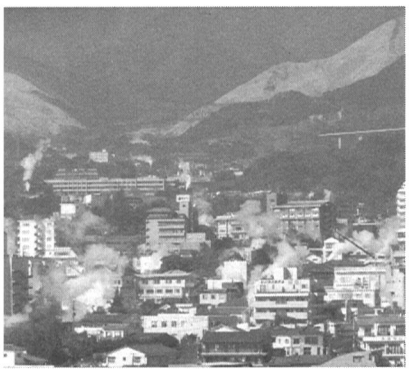


写真　鉄輪温泉の湯煙
（筆者撮影）

参考：山村順次（1981）：温泉観光都市・別府の地域変化。千葉大学教育学部紀要。

（山村順次）

大分県由布市由布院温泉：新しいリゾート空間を創造した保養温泉地

1　形成

大分県中部由布院市に位置する由布院温泉は、標高1,583mの由布岳（豊後富士）の麓に広がる日本有数の湯量を誇る温泉地である。この温泉地は奈良時代の『豊後国風土記』にも記され、古い歴史を誇る。大正時代までは“別府十湯”の一つに数えられていた。

由布院温泉を本格的に開発したのは大正末に金鱗湖脇に別荘を建てた油屋熊八である。彼は別府に創業した「亀の井ホテル」の客や著名人をこの地に招いた。その後、この別荘は「亀の井別荘」として開業した。同じ頃「公園の父」と呼ばれている林学者本多静六は由布院温泉について自然を取り入れた静かな温泉地の適地と称賛している。

第2次世界大戦後の1952（昭和27）年に巨大ダム建設計画とダム湖の観光開発計画が提示され、町議会も推進したが町民の反対で白紙となった。1959年には国民保養温泉地に指定された。1970年には近郊にゴルフ場建設が表面化したが、自然保護の観点から反対運動が広がり中止された。その後も開発計画が持ち上がったが、住民の反対で撤回されてきた。

押し寄せてくる開発の波に対して、住民たちも当時の町長や青年リーダーのもとで由布院の将来について主体的に考え始めた。そして、ドイツのバーデン・ワイラーをモデルとしたクアオルト（温泉保養地）構想を固め、1981年には国民保健温泉地の指定を受けた。また、町民手作りの音楽祭や映画祭を実施していった。その結果、今日では由布岳を背景とした田園風景と点在する旅館が調和する保養温泉地が形成され、女性を中心として幅広い人気を博している。

由布院温泉はJR久大本線「由布院」で下車すると、駅前正面に由布岳を眺めることができる。JR九州は博多から特急「ふゆいんの森」号を運行して女性客の人気を集め、週末は予約が困難なほどである。また、大分自動車道由布院インターからJR駅までは10分程度である。

2　現状

由布院温泉は、単純泉で温泉湧出量は毎分4万1,000L、源泉の数は814本でともに別府温泉郷に次いで全国第2位である。また、共同浴場は14ヵ所あり、なかには江戸時代から続くものもある。

由布院温泉には2012（平成24）年現在で96軒の宿泊施設がある。宿泊者数は2000年以降90万～100万人で推移してきたが、2010年には70万人にまで減少している。旅館の立地は金鱗湖から大分川周辺部にかけて点在し、その周辺にこの温泉地が売りとしている田園風景を形成する農地が広がっている。しかし、近年ではその市街地郊外にも離れを持つ和風旅館が展開している。

1990年には、入浴や水着での健康浴が楽しめ、ドイツ式の温泉療法が体験できる市営（当時は町営）の「ゆふいん健康温泉館（クアージュゆふいん）」が開業し、1970年代からの構想が結実した。観光客が集まる湯の坪通り中心とした市街地を取り囲むように保養向けの旅館とともに小規模な美術館・展示館が点在している。今日のリゾートエリアの形成は、1990年に制定された「潤いのあるまちづくり条例」によるところが大きい。この条例によって景観維持のために建物の規模や高さなどを規制した。条例にはまちづくりの主体は住民であり、事業者との合意のもと開発を管理する「成長の管理」の理念が盛り込まれた。

一方、駅前から金鱗湖に至る道路にはキャラクターグッズ店や土産物店が立ち並ぶ。と

りわけ湯坪通りには小規模な店舗がひしめき、休日にもなると大勢の観光客が往来し混雑する。この界隈の店舗のほとんどは外部資本によるもので、数年で閉店する店舗も多く、通りの雰囲気はめまぐるしく変わる。

3　課題

由布院温泉は住民が主体となって新しいタイプの滞在型の保養温泉地を創りあげ、今日では“ゆふいんブランド”として確立している。その一方、湯の坪通りは保養温泉地とは全くの別世界が展開し、ここを目当てにやってくる観光客も多く、来客者の分極化が進んでいる。このエリアは大半の店舗は外部資本で経営者の移り変わりも激しい。その結果、空き店舗が常態化している。また、条例に抵触しない小規模な開発が所々で見られ、湯の坪通り近辺には小規模な商業施設、大分川の南側の田園地帯には宿泊施設が進出してきている。さらに、休日ともなると道幅の狭い湯の坪通り周辺にマイカーや観光バスが押し寄せ、慢性的な渋滞を引き起こしている。当時の湯布院町は2002年に郊外に臨時駐車場を設け、中心地区への車乗り入れを規制する社会実験を実施したが、今日まで有効な対策は見出せていない。

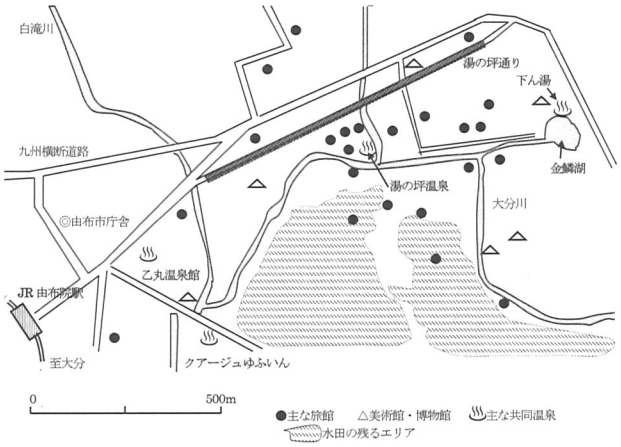


図　由布院温泉の概要
（筆者作成）

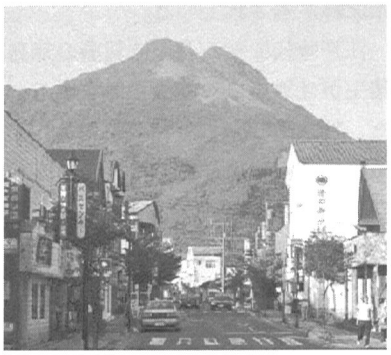


写真　由布院駅前通りと由布岳
（由布院観光協会資料）

参考：前田　弘（2001）：成長の管理：自律的観光としてのリゾートづくり、国立民族学博物館調査報告 21。
中山　昭則(2011)：由布院温泉における地域構造の変容に関する考察。大分県温泉調査研究会報告(62)。

（中山昭則）

佐賀県武雄市武雄温泉：旧長崎街道の温泉宿場町の変容

1　形成

武雄温泉は、730（天平３）年頃に編纂された『肥前国風土記』に「人が余り行かない険しい岩山にある温泉」と紹介されているように、現在も桜山の流紋岩の岩脈から温泉が湧出している。平安時代末期から鎌倉時代には、後藤氏が武雄温泉を整備し、聖一国師の廣福寺開山によって世に知られるようになった。安土桃山時代には、豊臣秀吉による朝鮮出兵のおりに名護屋城に集結した将兵たちが、戦陣の疲れを癒すために武雄温泉を訪れた記録が残されている。

江戸時代になると、佐賀藩の鍋島家累代の藩主が武雄温泉に湯治で滞在するようになった。1700年代の享保年間には、塩田川の度重なる洪水により長崎街道の往来が困難になると、武雄温泉に本陣や脇本陣が整備されて、参勤交代の大名行列が訪れるようになる。こうして、武雄温泉は近隣の嬉野温泉とともに多くの旅人が行き交う長崎街道の宿場町として栄えたのである。オランダ商館の役人や行商の旅人、地域の湯治客などは武雄温泉を訪れ、武雄宿に賑わいをもたらした。なお、武雄温泉は江戸時代まで柄崎（塚崎）温泉と呼ばれており、1895（明治28）年の九州鉄道武雄駅（現JR佐世保線武雄温泉駅）開業にともない武雄温泉の名称が一般に用いられるようになった。

近代における武雄温泉の発展の転機は、武雄駅開業によって入浴客が急増したこと、東京駅を設計した佐賀県唐津市出身の辰野金吾により、1915（大正４）年に天平式楼門と共同浴場の新館が建てられて武雄温泉のシンボルとなったこと、1923年に武雄温泉組を改組して武雄温泉株式会社が設立され、源泉の適正管理が行われるようになったこと、そして昭和初期に各温泉旅館に内湯が設けられたことである。

第２次世界大戦後の高度経済成長期、武雄温泉は源泉の新たな掘削によって溝ノ上地区に第２温泉街が形成され、桜山公園から鍋倉山にいたる観光道路が建設されるとともに、御船山を中心とした南部の観光開発が進展した。これに対応して、武雄温泉の宿泊施設は規模が拡大され、日観連加盟旅館は1966（昭和41）年の10軒197人から1977年には11軒983人と、収容人員が５倍に増加した。こうして、武雄温泉は療養保養の温泉地から観光温泉地へと変容することになったのである。

2　現状

武雄市には、古来の武雄温泉と高度経済成長期に開発された溝ノ上温泉（保養村）があり、広域的に両者を総称して武雄温泉と呼んでいる。22ヵ所の源泉から、約20℃～50℃の熱水が毎分600L（武雄温泉350L、溝ノ上温泉250L）湧出している。泉質はアルカリ性単純泉（pH8.2～9.2）である。

武雄温泉の龍宮城を想起させる楼門と新館の朱塗りの建物は、2003（平成15）年に復原された。これらの建物は学術的に評価され、2005年に国の重要文化財に指定され、武雄温泉のシンボルとして観光客や住民に親しまれている。2012年現在、武雄市内には武雄温泉街を中心として26軒、収容人数1,945人の宿泊施設が営業している。

武雄市のいま一つの名所は、江戸時代に武雄領主の庭園であった御船山楽園である。この庭園は春に5,000本の桜、20万本のつつじ、初夏は新緑と紫陽花、秋は紅葉、そして冬は椿といったように、四季折々の美しい風景が楽しめる花見の名所である。

武雄市の観光客数は157万人（2010年）

である。その内訳は、日帰り客135万人（86%）、宿泊客22万人（14%）であり、自家用車による来訪が全体の76%となっている。これは国道や長崎自動車道武雄ICを利用する道路交通、特急電車が停車するJR武雄温泉駅が整備されていることによるものである。発地別では、県内47%、佐賀県を除く九州各県44%といったように、九州の観光客が全体の91%を占めている。

3　課題

武雄市は陶磁器を生産する市内の窯元と武雄温泉の宿泊施設の協力を得て、「いで湯と陶芸の里」をキャッチフレーズに誘客促進を図っている。武雄温泉街の宿泊施設では、毎年４月１日～６月30日の３ヵ月間「武雄温泉まちなか陶芸祭」を催し、窯元作品の展示・販売、まち歩き、窯元めぐり、陶芸体験などを観光客に楽しんでもらうようにしている。

このような地場産業を活かした温泉地活性化の取り組みは評価できるが、武雄温泉の喫緊の課題としては、温泉街の街なみ整備である。武雄温泉街を歩くと湯けむりの光景は見られず、荘厳な楼門が寺社の門前町の印象を与え、ここが温泉地であることが観光客には感じられない。中層マンションの混在や電線の混雑、看板の形状と色彩の不統一が街なみ景観を阻害している。また、旧長崎街道の温泉宿場町としての歴史や史跡・文化財などを、どのように観光活用するかが課題である。

写真　国指定重要文化財の武雄温泉新館
（筆者撮影）

図　武雄温泉と周辺施設
（筆者作成）

参考：武雄市図書館・歴史資料館編（2003）：『温泉－和みの空間－』同館。
さが情報統計情報館（2012）：『平成23年度版佐賀県統計年鑑』佐賀県経営支援本部統計調査課。

（池永正人）

長崎県雲仙市雲仙温泉：山岳宗教の霊場と外国人避暑地として繁栄

1　形成

雲仙天草国立公園の集団施設地区である長崎県の雲仙温泉は、島原半島を形成する雲仙岳の中腹（標高700m）に位置する。雲仙温泉の源泉は、古湯地区と新湯地区の間に位置する雲仙地獄である。そこには最高温度98℃の硫黄泉と炭酸ガスや硫化水素ガスを含む強い硫黄臭の漂う噴気孔が多数分布し、白色の温泉余土が広がる。

雲仙温泉は、701（大宝元）年の僧行基による真言宗「温泉山満明寺」の開山が始まりとされている。雲仙地獄は、仏教の影響を受けて地獄信仰と結びついた。不気味な音を立てて噴出する水蒸気と硫黄分を含んだ熱泉は、民衆に視覚的に訴える地獄思想と救済を説く好個の景観であった。江戸時代まで女人禁制であった満明寺の霊場には、千人もの僧侶が修行していたと伝えられる。

江戸初期の1627（寛永４）年に始まった「山入り」と称されたキリシタン弾圧は、雲仙地獄の熱湯を浴びせる改宗手段であり、島原藩主と長崎奉行により７年間におよび行われ、33名の信者が処刑された。これが世に言う「雲仙の地獄責」である。この雲仙地獄はカトリックの殉教地となっており、毎年５月の中旬に殉教祭が行われている。雲仙地獄から湧出する温泉が湯治として利用されるようになるのは、1653（承応２）年に加藤善左衛門が古湯に「延暦湯」を開いてからである。以降、島原藩主の保護のもと雲仙は湯治場として発展した。江戸時代に長崎の出島に赴任していたオランダ商館医のケンペルやシーボルトは、彼らの著書等で雲仙をヨーロッパに紹介した。

明治時代以降、長崎が国際貿易港として発展すると、涼しい夏季の雲仙は、長崎居留の外国人や中国の上海租界、香港に住む西洋人の避暑地として賑わうようになった。そして、1934（昭和９）年には霧島・瀬戸内海とともに日本初の国立公園に指定された。第２次世界大戦後の1945年～1949年までは、雲仙温泉の洋式ホテルがアメリカ軍の保養所として利用され、やがて高度経済成長期の大衆観光時代が到来すると、日本人観光客が雲仙温泉に多数訪れるようになった。雲仙温泉に和洋折衷の温泉文化が形成されたのは、このような歴史的背景によるものである。

2　現状

雲仙温泉は1300年余の歴史を有し、周囲の景観は春のミヤマキリシマ、夏のヤマボウシ、秋の紅葉、冬の霧氷など四季折々に美しい。また、雲仙普賢岳の噴火によって誕生した日本で最も新しい平成新山（1483m、1996年命名）や活発に熱水を湧出する雲仙地獄など、特異な景観を間近に見ることができる。このような長い歴史と美しい自然を有する雲仙温泉を訪れる観光客は、温泉入浴と自然探勝・史跡散策を楽しんでいる。

雲仙温泉の宿泊客は38万人（2011年）である。近年の個人客や家族客の増加に伴って、観光客は街歩きを楽しむ傾向にある。このことを商店街活性化の契機到来と受け止め、街なみ整備を実施することにした。商店街が立地する古湯地区には、30余年の歴史を有する「雲仙湯のまち通りを考える会」がある。この会は、商店街の活性化を目的とした「雲仙古湯地区再生調査」を雲仙市と企画し、2006（平成18）年度の「全国都市再生モデル事業調査」（内閣府）に応募して採択された。雲仙市はこの調査結果を踏まえ、古湯地区の集落構造改良（７ha）に「街なみ環境整備事業」（国土交通省）を活用し、ファサード整備（建物外観整備）に工事費の

補助が受けられるようになったのである。そして、2008年度に7棟、2009年度は21棟、最終の2010年度は10棟の計38棟がファサード整備された。国立公園の集団施設地区であることから、建物の外観は形状・高さ・色彩などの整備基準が設けられている。また、2010年度から2012年度の3年間、古湯地区を流れる湯川の河川改修が実施され、防災機能の強化と散策路・公園の観光整備がなされた。

3　課題

雲仙温泉の主な課題としては、雲仙温泉に至る主要道路の車窓風景を良くするための森林管理、廃業したホテルの解体と跡地の活用、外国人観光客の多国籍化を図る体制と施設の整備などがあげられよう。

雲仙天草国立公園の雲仙地区では、2034年の国立公園指定100周年に向けて、街づくり・観光地づくりの新たな事業計画が策定された。これは「雲仙プラン100」と称され、2011年12月11日に事業が公表された。既述の古湯地区のファサード整備と湯川の河川改修は、その礎といえる。上記の課題も指摘しているこの事業計画を着実に実施するためには、観光客や雲仙の自然・歴史・文化に関心のある地域外の人に参加を呼びかけ協働することが肝要である。地域内部の力が足りなければ、外部の人の力をうまく導入することで、社会環境の変化に順応した持続可能な観光地づくりの推進が可能になる。

写真　ファサード整備後の古湯の町並み
（筆者撮影）

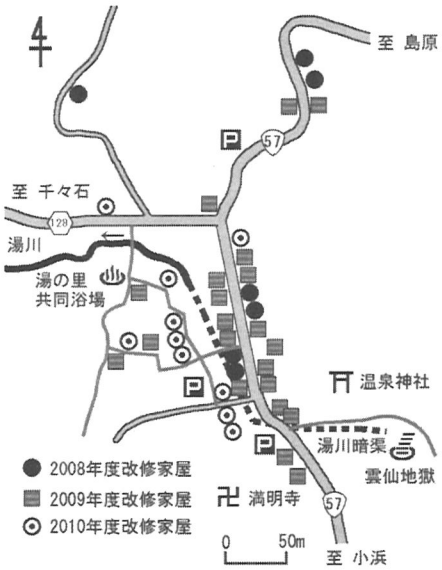


図　雲仙古湯地区のファサード整備
（筆者原図）

参考：池永正人（2009）：「雲仙地獄の観光資源性」、温泉地域研究、第12号。
池永正人（2012）：「雲仙古湯地区ファサード整備の効果」、温泉、第80巻第3号。

（池永正人）

熊本県南小国町黒川温泉：急成長を遂げた山間の観光温泉地

1　形成

熊本県の北東部に位置する黒川温泉は人口約4,500人の阿蘇郡南小国町に位置し、田の原（たのはる）温泉と満願寺温泉とともに国民健康保養地「南小国温泉郷」（1964年に指定）を構成する山間部の温泉地である。大分県との県境に接しており、くじゅう連山に接する熊本県の阿蘇温泉郷の中で人気の高い温泉地である。黒川温泉の名称は地域団体商標登録がなされており、黒川温泉観光旅館協同組合加盟の28軒のみが商標として使用している。

歴史は古く、1706（宝永3）年には『肥後国誌』に「熱湯井腐湯」としての記載が見られる。現在も営業を続ける旅館のうち最古のものは1722（享保7）年の開業であり、江戸時代には細川藩の御用宿であった。しかし、交通が不便な小さな山の湯治場に過ぎなかった黒川温泉は、規模を拡大することもなく戦後に至る。高度経済成長時代に入り、有料道路「やまなみハイウェイ」が1964（昭和39）年に開通して以後は、別府・由布院方面からの周遊観光客が増え、旅館が黒川温泉内に相次いで開業し、湯治場から脱却した。ただ、「やまなみハイウェイ」のルートから外れていることからブームは長続きせず、元の静かな温泉地に戻った。

1975年頃から旅館経営者の子弟が帰郷し、親の旅館経営を引き継ぐようになった。黒川温泉の場合は息子のみならず、娘が婿養子を迎えて引き継いだケースが少なくない。こうした二代目の若手経営者が、休眠状態にあった黒川温泉観光旅館協同組合の再興を図り、旅館の女将の発案により1986年に入湯手形の発行をスタートさせた。これは、1,200円で購入した1枚の手形に3枚のシールが張られており、3ヵ所の旅館の露天風呂を巡ることができる制度であり、発足翌年のシール利用数は3万2,000枚であったが2000（平成12）年には25万枚となり、また1989年の宿泊客数約18万人は、2002年には40万人に達した。この手形の収益は様々な形で地域に還元され、旅館組合案内所の運営の原資にもなっており、地域経済の循環に大きな役割を果たしている。

2　現状

黒川温泉は、基本的に各旅館が泉源を有しており、各旅館の泉質が異なるところに大きな特徴がある。このため、隣り合わせの旅館にもかかわらず、湯の色が全く異なることさえある。このような特徴は観光客にはあまり知られておらず、案内所では「どこが一番有名な温泉ですか」と尋ねる人が多い。そこで、旅館組合では泉質ごとに分類したパンフレットを作成して、温泉の成分や適応症に興味を持ってもらえるように工夫している。また、温泉街の建物の大半が景観に調和した和風旅館であり、歓楽施設がないうえに土産品店も存在しない。このため、観光施設での買い物を期待して来る客は落胆するが、逆に「日本のふるさと」を求めて来訪した客の評価は非常に高い。これは、黒川温泉が地域資源を生かして街づくりを進めてきたことの表れである。

黒川温泉は旅館組合や自治会などの地縁団体の結束が強く、行政にあまり頼ることなく地域振興を進めているところに大きな特徴がある。このため、観光地にありがちな行政からの補助金を活用した事業はほとんど見られない。行政は公衆トイレなどのインフラ部分を担当しており、観光振興へのかかわりは南小国町全体で動いている。つまり、地域と行政は役割を分担して強調している形になって

おり、自立した地域振興の好事例である。

3　課題

入湯手形と露天風呂めぐりで一世を風靡した感のある黒川温泉であるが、抱える問題は山積している。そこに共通するのは、観光客と受け入れ側の住民との意識のギャップが大きいことであり、このことが近年の宿泊客の減少につながっている。

黒川温泉に限らず九州全体の傾向ではあるが、日帰りで旅館の温泉に入浴する「立ち寄り湯」の人気が若い人を中心に高く、銭湯と同じ感覚で訪ねてくる人が多い。このため、露天風呂に石鹸やシャンプーがないことに対しての苦情も見受けられる。温泉は、本来お湯に含まれる成分を身体に浸透させて健康増進を図る意味合いがあることを知らない人が多く、それを熟知している受け入れ側の意識との違いが際立ってきている。また、1980年代後半から急に発展した黒川温泉は、他の有名な温泉地に比べ、首都圏を除いては全国的な知名度は必ずしも高くない。さらに、本州方面から来訪する客は「せっかく遠い九州まで来たのだから」、短い日程で複数の観光地を周ることが多い。黒川温泉（熊本）は由布院（大分）と高千穂（宮崎）の３点セットで組み合わされるため、黒川には宿泊せずに立ち寄り湯だけにとどめる人も多い。加えて交通が不便であるため、交通手段の問い合わせが多いが、本州方面から飛行機で九州入りする客には、案内所ではレンタカーでの移動を薦めている。しかし、急坂や急カーブが続く周辺道路で、立ち往生しているレンタカーも見受けられる。首都圏の客からは、「公共交通機関を教えてほしい」と言われることが多い。また、「黒川温泉へは大分空港から行かなくてはならない」という誤解さえあり、福岡からの直通バスをはじめ、各地からバスが運行されている現状と乖離している。

黒川温泉は地域としてのＰＲはしても、他の地域との連携はあまりない。そのために、旅行業者やマスコミによって組み合わされたルートに合わせさせられている現状がある。今後は自らの特長を積極的に発信するとともに、南小国町が属する阿蘇地域や熊本県内の他地域との連携を進めていくことが急務であると言えよう。

図　黒川温泉の位置
（筆者作成）

写真　黒川温泉の和風旅館
（山村順次撮影）

参考：浦 達雄（2010）：『最近の黒川温泉における小規模旅館の動向』温泉地域研究 15 号

（能津和雄）